大学礼拝

説教集

第 24 号

2020

東北学院大学

大学礼拝

説教集

第24号

2020

東北学院大学

目次

巻頭言　宗教部長　野村信……4

シュネーダー先生の理想　学長　大西晴樹……6

敵を愛する　理事長・院長　松本宣郎……12

真実に生きる　日本基督教団仙台広瀬河畔教会　望月修……17

何を聞いているか、注意せよ　日本基督教団仙台東一番丁教会　瀬谷寛……22

偽りのない生き方　日本基督教団仙台東六番丁教会　中本純……26

なぜ、怖がるのか　日本基督教団石巻山城町教会　関川祐一郎……32

『神の愛』をいただいて愛し合う　日本基督教団　平賀真理子……37

キリストとの出会い　東北学院中学校・高等学校　宗教主任　松井浩樹……42

今日、救いがこの家を訪れた　東北学院榴ケ岡高等学校　宗教主任　西間木順……47

いかなる場合にも対処する秘訣　宗教部長　野村信……52

愛の証し　大学宗教主任　阿久戸義愛……57

正義の救い主とは？　大学宗教主任　木村純二……63

手を放したところから　大学宗教主任　田島卓……68

光の子として賢く生きよう　大学宗教主任　原田浩司……75
神に任せる　大学宗教主任　吉田新……81
キリスト教と占星術　総合人文学科長　川島堅二……85
死と弱さを神に捧げよう　文学部教授　鐸木道剛……90
あちら側からの視線　経営学部教授　松村尚彦……95
真の希望　法学部教授　横田尚昌……100
復活の体　工学部准教授　長島慎二……105
人生を変える秘訣　教養学部准教授　大澤史伸……110
東北学院の最初のクリスマス　東北学院史資料センター　日野哲……116
【音楽礼拝】ある日の音楽礼拝　大学オルガニスト　今井奈緒子……122
音楽礼拝　二〇一九（令和元）年六月三日(月)　宗教音楽研究所特任准教授　中川郁太郎……130
【英語礼拝】Living With A Beautiful Attitude　本学非常勤講師　佐々木キャロル……136
編集後記　大学宗教主任　阿久戸義愛……137

巻頭言

命・光・愛

宗教部長　野村　信

命は人間を照らす光であった。

（ヨハネによる福音書　第一章四節）

東北学院の「建学の精神」を象徴するスクールモットー、「LIFE LIGHT LOVE」は、イエス・キリストの「命」・「光」・「愛」を指します。この言葉は、新約聖書のヨハネによる福音書とヨハネによる手紙が、他のどの書よりも多く用いて、主イエス・キリスト自身を指す言葉として用いています。しかも執筆者ヨハネは、彼の福音書と第一の手紙の、いずれにおいても、冒頭にその言葉を書き留めています。

ヨハネによる福音書については、右に掲げたように、第一章四節にあります。手紙においては、その冒頭の第一節で、始めに「命の言葉」があったと書き出します。すなわち、いずれの書においてもキリストの「命」が「光」として、人間と世界を明るく照らしてくださっている

と言われます。

「愛」は、どこにあるのでしょうか。実は、「恵み」という言葉と「愛」は同義語ですから、ヨハネによる福音書においては第一章一四節以下で「恵み」という言葉が四回も書き留められています。しかし「愛」という言葉がはっきりと用いられるのは、第三章一六節からです。そこから堰（せき）を切ったように、三十七回も、「愛」という言葉が使われます。ヨハネ福音書は「愛の福音書」と昔から言われてきましたが、そのとおりに、神の愛が世界に満ちていることが力強く語られ、この愛に押し出されて私たちも人々へ愛をもって向かうように勧められています。

本学院の創立時に遡（さかのぼ）れば、二人の校祖であるアメリカの宣教師、W・E・ホーイとD・B・シュネーダー両先生は、この「命・光・愛」（LIFE LIGHT LOVE）を胸に刻んで、今から百三十四年前に来仙しました。そしてもう一人の日本人の校祖、押川方義と仙台神学校を設立し、今日の東北学院の礎を築きました。

大学礼拝で説かれる説教は、総じてこの三つの言葉を様々な角度や切り口で先生方が語られます。私たちも、この「命・光・愛」を聖書からよく学び、心に抱いて、地域へ、社会へ、そして世界へ心を向け、関わっていけたら幸いです。新しい年度を迎えたこの時期に、この「建学の精神」を胸に抱いて、大胆に一歩を踏み出してください。

シュネーダー先生の理想

学長　大西晴樹

マタイによる福音書　一三章第一～九節

1その日、イエスは家を出て、湖のほとりに座っておられた。2すると、大勢の群衆がそばに集まって来たので、イエスは舟に乗って腰を下ろされた。群衆は皆岸辺に立っていた。3イエスはたとえを用いて彼らに多くのことを語られた。「種を蒔く人が種蒔きに出て行った。4蒔いている間に、ある種は道端に落ち、鳥が来て食べてしまった。5ほかの種は、石だらけで土の少ない所に落ち、そこは土が浅いのですぐ芽を出した。6しかし、日が昇ると焼けて、根がないために枯れてしまった。7ほかの種は茨の間に落ち、茨が伸びてそれをふさいでしまった。8ところが、ほかの種は、良い土地に落ち、実を結んで、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍にもなった。9耳のある者は聞きなさい。」

皆さんは、シュネーダーという名前を知っていますか。アメリカ・ドイツ改革派教会派遣の

アメリカ人宣教師です。今年東北学院は創立一三三周年を迎えましたが、創立記念式のさいに、この（土樋の）礼拝堂の祭壇に三校祖の肖像画が並びます。押川方義初代院長、副院長のホーイ博士、そして第二代院長のシュネーダー先生です。ホーイ博士は、皆さん、道路を隔てて本館と向き合っているガラスの建物ホーイ記念館で有名ですが、シュネーダー先生の名前も、気づいている人は少ないかもしれませんが、本学の図書館のことを正式にはシュネーダー記念図書館と呼んでいます。三人の設立者のうち、押川先生もホーイ先生も、創立後十数年のうちに、東北学院を辞めてしまいましたが、シュネーダー先生だけは、いまから一三二年前に仙台神学校に教員として着任し、仙台で天に召されるまでの半世紀の間、在日のすべての期間を東北学院のために捧げた人です。ですから、東北学院が産声を挙げ、戦前に立派な学校として名声を得るまで、この学校をリードしてきた人物であると理解してください。

それが証拠に、森ビルの開発だと思いますが、現在はウェスティンホテルが建っているところに中高の建物を建てました。仙台駅に近い仙台の真ん中です。またこの土樋のキャンパスを作ったのも、シュネーダー先生だと言っても言い過ぎではありません。先生は、キリスト教の大学の理想を求めて、教室や事務室として使われた白亜の本館、その左手に集会のためのホールとしてこのラーハウザー記念東北学院礼拝堂、そして右手に読書室としての図書館を配置し、理想のキャンパスを作ろうとしたのです。ホーイ記念館のガラス張りのエレベーターから

眺めるとわかるのですが、このように美しくてコンパクトで、大学として理想の設計になっているのは、おそらく、池袋の立教大学ぐらいではないでしょうか。

さて建物の話ばかりしてきましたが、シュネーダー先生はどのような人だったのでしょうか。デイヴィド・ボウマン・シュネーダー先生は、一八五七（安政四）年にアメリカ合衆国ペンシルヴァニア州ランカスター郡に生まれました。先祖は十八世紀のはじめにスイスからアメリカに移住したとのことです。とくに、シュネーダー先生の生まれ故郷ペンシルヴァニア州のランカスターには「ペンシルヴァニア・ダッチの国」というあだ名がついています。このあだ名は、オランダ人を意味するのはなく、ドイツ語から派生した言葉ですが、ランカスターにスイスを含むドイツ語圏からの移民が多いことを意味しています。またランカスターには、皆さんもご存知の「アーミッシュ」といわれる人々のコロニーもあります。彼らは、現代文明の所産である電気や自動車使用を拒否し、共同生活を通じて厳格な信仰を守り続けています。シュネーダー先生は、まじめで勉強熱心でした。若い時に小学校の教師をしたあとで、現在本学の協定校でありますランカスターのフランクリン・アンド・マーシャール大学に入学し、そののち、アメリカ・ドイツ改革派のランカスター神学校に進学しました。当時アメリカでは、海外に赴きキリスト教を世界に伝えることが目覚めた学生たちの間で目標になっていました。成績優秀でまじめなそのシュネーダー先生ですが、若い時に挫折したことがありました。それは、

神学校卒業の際に、日本への宣教師を志願しましたが、独身であるために試験に落とされ、日本に来られなかったのです。しかし、シュネーダー先生は、三年間牧師として教会で働き、教会の女子青年で一〇歳年下のアンナさんを好きになりました。なにせ、アンナさんの家は、サスケハナ川という大きな川の向こう岸にあったので、ボートを漕いで会いに行ったといわれています。二人はめでたく結婚し、ホーイ先生に来日や来仙では、先を越されますが、宣教師派遣の条件を満たし、夫婦ともに五〇年間、東北学院のために尽くされました。そんなお人柄です。

では、どんな教育理念をかかげられていたかというと、その特徴は、物事を深く考えるプラグマティズムの持ち主を育てることでした。今から一〇〇年前に刊行された「日本におけるキリスト教教育指針」のなかで、先生はこう述べられています。「我々が育てようとする人物は消極的に言えば、ただ時流に乗ったり、置かれた環境すべてにただ従ったりしない人間であるべきである。そのような世に流される人間は、名目上クリスチャンであろうとなかろうと、われわれの教育の目的にかんする限り、落伍者である。・・・積極的に言えば、知的な面としては、よくものを考え、・・・よく会得され身に着いた知識は、ただ記憶された事実の集積ではない」。プラグマティズムというと、実利的な感じがしますが、先生はまったくそうではなく、深く考える個人の大切さと、その体系性を重んじるプラグマティズムの大切さを説いているの

です。第二の側面は、道徳的側面です。責任主体としての人間が具体的に述べられています。「その人物はとりわけ、キリストの精神、奉仕と自己犠牲の精神によって支配された人格の持ち主である」。東北学院の建学の精神はキリスト教による人格教育ですが、シュネーダー先生の時から用いられたスクールモットーは、Life ,Light and Love for the World です。私たちは、Life 人間を大切にし、Light 大学で学ぶ知識を、Love for the World この世のために、すなわち、地域や世界のために愛をもって仕えるという目的をもつことこそが、シュネーダー先生の教育の理想にかなうことであり、この聖書が述べている「良い土地」に東北学院大学をすることだと考える次第です。

先ほど読んだ聖書の箇所は、種を蒔く人のたとえといわれている箇所です。どうして、「道端」、「石地」、「茨の間」、そして「良い土地」という区分でもって、収穫についてイエスは言及しているのでしょうか。イエスが生きた古代地中海地方の種蒔きは、人が乾いた種を空に蒔き、風の力を利用して方々に蒔き散らすような粗放なものでした。それゆえ、道端、石地、茨の間などに種が飛んで行って着地したのです。イエス・キリストの福音は、まさにその通りで、いろいろな場所に蒔かれるのです。人間は、上手くいかないとその原因をすぐ他人や環境のせいにします。たとえば、教勢が伸びないと日本は石地のようなものだ、信仰が根を下ろさず、すぐに枯れあがってしまうとか。あいつの信仰は、茨の間に蒔かれた種のようなものだ。

すぐに仕事や趣味が気になってその芽がふさがれてしまうなどと解釈しているのです。しかし、道端であろうと、石地であろうと、茨の間であろうと、大切な種はいろんな場所に蒔かれているのです。私たちがシュネーダー先生の理想であるキリスト教による人格教育を感謝と祈りとをもってさらに発展させていくことこそが、先人たちが築き上げた東北学院をいっそう「良い土地」にすることだといえるのではないでしょうか。

敵を愛する

理事長・院長　松本宣郎

ルカによる福音書　六章二七～三六

27「しかし、わたしの言葉を聞いているあなたがたに言っておく。敵を愛し、あなたがたを憎む者に親切にしなさい。28悪口を言う者に祝福を祈り、あなたがたを侮辱する者のために祈りなさい。29あなたの頬を打つ者には、もう一方の頬をも向けなさい。上着を奪い取る者には、下着をも拒んではならない。30求める者には、だれにでも与えなさい。あなたの持ち物を奪う者から取り返そうとしてはならない。31人にしてもらいたいと思うことを、人にもしなさい。32自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな恵みがあろうか。罪人でも、愛してくれる人を愛している。33また、自分によくしてくれる人に善いことをしたところで、どんな恵みがあろうか。罪人でも同じことをしている。34返してもらうことを当てにして貸したところで、どんな恵みがあろうか。罪人さえ、同じものを返してもらおうとして、罪人に貸すのである。35しかし、あなたがたは敵を愛しなさい。人に善いことをし、何も当てにしないで貸しなさい。そ

うすれば、たくさんの報いがあり、いと高き方の子となる。いと高き方は、恩を知らない者にも悪人にも、情け深いからである。36あなたがたの父が憐れみ深いように、あなたがたも憐れみ深い者となりなさい。」

「汝の敵を愛せよ」。少し古い聖書訳でよく口にされたイエスの言葉です。これを受けて「迫害する者のために祈れ」、と続けられます。イエスが語られた、私たちの生き方に指針を与え、あるいは警鐘を鳴らす、断言的な言葉の一つです。

イエスのこのような強い印象的な言葉のいくつかは、世間的常識を越える、あるいはそれらに反する内容です。「貧しい人々は幸いである」、「すべての人にほめられるとき、あなたがたは不幸である」（ルカ六・二〇、二六）などなど、枚挙にいとまがありません。よく「逆説的」と表現されるこのようなイエスの命令の言葉は、神の絶対的な力を示すために語られているとか、人知を超えた、神の国との関わりで理解すべきだと言われます。

もう一つ、イエスの強い言葉の背景として想像できるのが、イエスの弟子たちがイエスの教えに従って、日常の行動で教えを実践したり、福音を自分たちなりに世間に宣べ伝えようとするときに生じてくるユダヤ教の指導者層や一般人の反発や憎悪、それに根ざす迫害、という状況です。この状況は、イエスが十字架で処刑された後、彼が復活したことを信じる弟子たちが

キリスト教徒になってから、かえってひどいものになったかも知れません。その時代のキリスト教徒たちはイエスのこの言葉を、文字となって、彼らの間で読まれるようになった福音書から聞いたとき、強くひきつけられたのではないでしょうか。

そのような迫害の時代のキリスト教徒たちにとって、「敵を愛しなさい」というイエスの命令は、なかなか重いものだったでしょう。命を奪おうとすらして襲いかかる敵をも愛せというのですか、という問いも生まれたでしょう。

新約聖書で語られる「愛」はギリシア語では「アガペー」であって、同じギリシア語の「エロース」という一般的な、恋愛的な表現の言葉ではない、ということは知られていると思います。今日の箇所でイエスの用いた語も「アガペー」を源とする「愛しなさい」であります。敵ですら、深い意味で、神、あるいはキリスト、あるいは信仰の仲間を愛するのと同等に「愛しなさい」と言われるのです。真に逆説的です。自らを攻撃し、身体的にも精神的にも傷を負わせる敵に、神に対するように、親や友に対するように愛を注げ、というのです。

イエスが弟子たちに命じた、とりわけ他者に対する行動の指針は実に積極的でした。本日読んだルカ福音書六章三一節、「人にしてもらいたいと思うことを、人にもしなさい」がその典型的な箇所と言えます。もっともこれと同じ訓戒は、ユダヤ教の律法学者たちに見られるばかりでなく、古代ギリシアの哲学者や、中国の孔子にも見いだされます。加えていうならば普通

の人間の感情では、ルカのこれに続く部分にあるように、返礼を期待しているからこそ人は他者に好意をもって接するものです。

ところがイエスはこれを「罪人でも同じことをしている」と評します。ある意味ではユダヤ教の学者だけでなくギリシアの哲人をすら冷笑しているかのようです。「しかし、あなたがたは敵を愛しなさい。」人を愛するレベルがはるかに高いと言うべきかも知れません。敵をも愛する。これは人間が愛する対象の極限を超えた行為なのです。

これは単に潔さとか外見上みっともなくないように、とかいう底の浅い行為が求められているのではありません。ルカ福音書の六章三五節「何も当てにしないで」しなさい、というのです。もっともそれに続いて「そうすれば、たくさんの報いがあり」と、「当てに」するものがあるかのような言い方になっています。しかしその「当て」は人間的な、地上的な、目先の利得ではないことに気づかなくてはなりません。それは「いと高き方の子となる」ことなのです。「いと高き方は、・・悪人にも、情け深い」とあります。神の前には敵はない、すべては恵みを与えられるべき被造物なのです。敵をも愛する私たちは、神の子となってすべての人に分け隔てなく接することになるのです。

要するに「敵を愛する」とは人の世界を越えたことだということです。一番大切なことだと思うのは、イエス・キリストのように、キリストをまねて、そうする、と言うことです。

イエスは弟子を愛し、弱い人々を愛し、それのみならず彼を攻撃し、死に追いやった人々、彼を十字架につけ、槍で突き刺した兵士をも愛しました。そのように、私たちもすべての人を愛するのです。

私たちはこの命令をすぐには実行出来ないように思えます。そもそも私たちの身の回りにははっきりした敵などはいない、という感じもするでしょう。そのように考えるのではなく、イエス・キリストのように、人を愛そう、とそのまま受け取りましょう。私たちはそもそも弱いのです。出来ないことが当たり前です。だからあきらめる、というのではなく、あくまでイエスをまねるのです。自分を殺した敵をも愛されたキリストは、死んでも復活されたのです。そうである以上、私たちにも出来るのです。このことを信じましょう。

真実に生きる

日本基督教団仙台広瀬河畔教会　望　月　修

マタイによる福音書　第六章一節

見てもらおうとして、人の前で善行をしないように注意しなさい。さもないと、あなたがたの天の父のもとで報いをいただけないことになる。

主イエス・キリストは、善い行いは隠れてしなさい、という常識的なことをおっしゃられたのではありません。そうではなくて、あなたがたの生活の中に、神と自分とだけの関係を、しっかりと持ったらよい、と勧めておられるのです。すべてのことを、支配され、知っておられる、神がいらっしゃる。その神との生活を、いつでも、造っておかねばならない、と言われているのです。

具体的には、こうして礼拝を捧げることです。また、祈ることでありましょう。祈りは、人に聞かせるものではありません。礼拝も、「見てもらおうとして、人の前で」することではありません。礼拝も祈りも、神に、捧げるものです。

この箇所には、「善行」、つまり、善い行いが取り上げられています。日頃から、善い行いをすることが求められ、勧められもします。誰もが、大事なことのように思っています。しかし、善い行いは、「見てもらおうとして、人の前でする」ことでなく、むしろ、「天の父のもとで報いをいただく」ためなのだ、と主イエスは言われるのです。

この視点を欠いた、善い行いは、偽善になるでしょう。そうでなくても、自分を満足させるため、自己実現のために、善い行いをする、ということがあるのではないでしょうか。そのために利用された者からすれば、余計なお節介であるばかりか、我慢ならないことであるでしょう。

私たちの内にある大きな誘惑は、自分をよくみせようとすることにあります。私たちは、愚かなくせに、自分を誇りたがりますし、ほんの小さなことでも、自分が偉いと言いたいのです。また、つまらないことでも、見栄を張ります。しかし、人の前で取り繕っている私たちの生活の内面は、外(ほか)の者には見えません。夫婦や親子であっても、友人同士であっても、お互いに何を考えているか、本当には判らないものです。しかし、「神の前」には、隠しようがありません。神は、すべてを知っておられます。自分で気がついていないことも知っておられます。

アカデミー賞を受賞した『不都合な真実』という映画がありました。内容の真偽の程は別にして、真実であれば不都合でないと思うのですが、私たち人間の世界では、真実が不都合となる人や立場、組織があるのは事実でしょう。真実であっても、不都合なことは、お互いに隠し合おうとするのです。私たちの社会や生活に、いつも、ついて回る問題です。私たちは、神だってごまかせる、と思っているのではないでしょうか。

大切なのは、神が御覧になっておられることを、よく承知していなさい、「注意しなさい」ということです。神は、すべてを知っておられるのです。いや、神には、すべてを知っていただこうとすることです。

「さもないと、あなたがたの天の父のもとで報いをいただけないことになる」。判りにくいことかもしれません。これは、天にいます父なる神とその子とされた私たちとの関係です。「報い」が与えられるからと言っても、いわゆる報酬ではありません。贈り物のようなものだ、と言ったらよいかもしれません。

神は、御自分に立ち帰ろうとする者を憐れんでくださいます。それまでに背いて来た罪を赦してくださいます。それは、神の、まったくの御好意によるものです。それは、いつでも、私たちの思いを遥かに越えた恵みです。

神を前にした生活こそ、私たち人間が真実になることができる生活です。そこには、嘘や偽りが成り立つ余地はありません。私たちは、みな、いつかは、死にます。その時、為すべきことを自分がして来たかと言えるかです。人の目には、どう見えたにせよ、神は御存知であるはずだ、と言えるかどうかであります。死に際して、私たちは、自分がして来た生活の総決算をしなければなりません。自分のして来たことばかりでなく、自分が抱いて来た思い・・・。隠されていたことも、人に知られていなかったことも、すべてのことは問われ、神の御前に申し開きをしなければならないのです。このような神との関係は、他(ほか)の人に見せるためのものでないことは、誰が考えても判ることではないでしょうか。

本来、人間は、神に対して何かをしたからと言って、為すべきことをしただけのことで、「報い」は期待すべきものではありません。ですけれども、神に知っていただくのは、実は、ついには、神に、赦していただくためなのです。一人ひとりが、神に背いていた罪について、神の赦しを受け、神を仰ぐのです。そういう関係は、人との間に築くことができません。

正直で偽りのない生活をしたいと願いながら、人の前にすべてをさらけだす生活は、かえって無理が生じるものです。だからこそ、あなたがたの生活の中に、まず、神と自分とだけの関係を、しっかりと持ったらよい、と勧めておられるのです。

神は、いつも、私たちの父としておられます。それに対して、私たちは、この父なる神の憐れみのもとにある子として生きて行くことです。そこに、はじめて真実な生活が築かれて行くのであります。

父なる神。

人に対して取り繕った、偽善に満ちた生活をしがちな私たちです。それもこれも、神を見失った人間の惨めな姿であります。御前に、真実に生きる私たちであらせてください。

この祈りを主イエス・キリストの御名によって御前に捧げます。アーメン。

何を聞いているか、注意せよ

日本基督教団仙台東一番丁教会　瀬谷　寛

マルコによる福音書　四章二一～二五節

21また、イエスは言われた。「ともし火を持って来るのは、升の下や寝台の下に置くためだろうか。燭台の上に置くためではないか。22隠れているもので、あらわにならないものはなく、秘められたもので、公にならないものはない。23聞く耳のある者は聞きなさい。」24また、彼らに言われた。「何を聞いているかに注意しなさい。あなたがたは自分の量る秤で量り与えられ、更にたくさん与えられる。25持っている人は更に与えられ、持っていない人は持っているものまでも取り上げられる。」

「彼らに言いなさい。わたしは生きている、と主なる神は言われる。わたしは悪人が死ぬのを喜ばない。むしろ、悪人がその道から立ち帰って生きることを喜ぶ。立ち帰れ、立ち帰れ、お前たちの悪しき道から。イスラエルの家よ、どうしてお前たちは死んでよいだろうか」（エゼキエル書三三・一一）。

神は、わたしたちに、「死んではいけない」、とおっしゃいます。たとえ、悪人でも、「あなたが死ぬことはわたしの望みではない」、堂々たる神の言葉です。そして、「立ち帰れ、立ち帰れ」、とわたしたちに語り続けてくださいます。

芥川龍之介、という人の名前をご存じない方は、おそらくここにはほとんどおられないでしょう。この人の業績から取られた「芥川賞」といえば、権威ある小説家の称号です。その日本の文豪、芥川龍之介です。ある時、わたしの親しいある方が、この芥川が実際に読んでいた、と言われる聖書が展示されているのを見たそうです。明らかによく読み込まれている小説家の聖書だったそうです。革が擦り切れるほどの。そして、その展示会では、この芥川の聖書のとなりに新聞記事が並べられていたそうです。芥川の自殺を伝える大きな見出しの記事です。

芥川は、三十五歳の時に布団の上で死にました。自殺した枕の横に聖書がおいてあったそうです。芥川龍之介は、たった三五年の生涯で、ぼろぼろになるほど聖書をよく読んでいたそうです。彼の絶筆は、『西方の人』、という題の作品です。それは、主イエスの歩みを描いたものです。書き終えて、服薬したのでしょう。聖書を枕辺に置いてです。

これは、大きな問いかけです。これほど擦り切れるまで、聖書を読み込んだ人が、主イエスの物語を書き終えたその夜、自殺をしたのです。聖書が、命を生まずに死を生んでしまいまし

た。しかし、神は死を望んではおられません。そして、死の世界の闇に引き込まれそうになる者に、命の光へと導き出そうとして、「立ち帰れ、立ち帰れ」、と叫んでくださいます。

今日与えられたマルコ四・二一以下、主イエスはたとえをもって語られました。「聞く耳のある者は聞きなさい」、よく、注意して聞いてほしい、と言います。「ともし火を持ってくるのは」。元の言葉では、ともし火が来る、という言葉です。真っ暗闇の中で、向こうから光がやってきます。このともし火、光とは、主イエスご自身のこと、わたしたちの闇の中に光として近づいてくださいます。

ところがこの言葉は、こう続きます。「升の下や寝台の下に置くためだろうか」。せっかく闇に光がやってくるのに、それに升をかぶせ全く消してしまったり、誰にも見えない寝台の下においたりして、部屋の隅々に光を行き渡らなくさせる、というのです。これはもったいないこと、そしてありえないことです。しかしわたしたちは、主イエスの光を消す、というそのありえないことをしてしまう、というのです。主イエスが語ってくださるみことばを、自分を責め立てる言葉として聞いてしまい、耳をふさいでしまう、それは主イエスを消すことです。

あるいは逆に、その光に堪えきれない自分を消してしまいます。枕元に聖書を置きながら、自分の命を絶つ。けれども、それは全くおかしなことです。主イエスもここでおっしゃっておられます。二四節「何を聞いているかに注意しなさい」。わたしたちは聖書を開きながら、何

を聞いているのでしょうか。たとえ話に何を聞いているのでしょうか。改めて確認したいのは、たとえ話は、どれも明るい話だ、ということです。

たとえ、主イエスが十字架で殺されようと、わたしたちが何度主イエスを消してしまおうとも、主イエスは、まことの命の主として甦ってくださって、わたしたちを捉え続けてくださいます。何と明るいことでしょうか。恵みに満ちていることでしょうか。

わたしたちに足りないのは、神に信頼することです。神の赦しに身を任せることです。足を止めて自分の中ばかり覗き込む「悔い」ではなく、主イエスの赦しの中に出かけていって、立ち帰る「悔い改め」を新たにしたいと思います。

祈り

わたしたちの中に、命を生み出してくださる神、

あなたの光の中に立たせてください。主イエスが来てくださいました。真の光としてきてくださいました。わたしたちの生活の隅々まで、主イエスの赦しの光に照らし出していただくことができますように。わたしたちを赦してください。あなたの赦しの中に、立たせてください。主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン

偽りのない生き方

日本基督教団仙台東六番丁教会　中本　純

『コリントの信徒への手紙一』第三章一八～二三節

18だれも自分を欺いてはなりません。もし、あなたがたのだれかが、自分はこの世で知恵のある者だと考えているなら、本当に知恵のある者となるために愚かな者になりなさい。19この世の知恵は、神の前では愚かなものだからです。「神は、知恵のある者たちを／その悪賢さによって捕らえられる」と書いてあり、20また、／「主は知っておられる、／知恵のある者たちの論議がむなしいことを」とも書いてあります。21ですから、だれも人間を誇ってはなりません。すべては、あなたがたのものです。22パウロもアポロもケファも、世界も生も死も、今起こっていることも将来起こることも。一切はあなたがたのもの、23あなたがたはキリストのもの、キリストは神のものなのです。

「だれも自分を欺いてはいけない」パウロはコリントの人々にそう訴えます。「自分を欺く」ということは自分に対して嘘をつき、偽るということを意味しています。古来よりギリシャの

コリントは国際都市で栄えた町で、そこには様々な人々が暮らしていました。そうした人々の中には、ギリシャ哲学やローマの法律学などを深く学んだ知識人もいました。そのような人たちがコリントの教会にやって来て、「自分は他の誰よりも知識があり、優れているから自分の言うことに従いなさい。」と教会の人々に命令をし始めたのです。また、二二節に出てくる「パウロ」、「アポロ」、「ケファ」、これらはコリントの教会が建てられた当初の教会の指導者たちの名前です。自分は知識に優れていると言う人たちは、それぞれ自分が気に入った指導者の名前を挙げて、「パウログループ」、「アポログループ」、「ケファグループ」といったように教会の中で勝手にグループを作り始めました。それがきっかけで、教会の中で相手のグループを悪く言う争いが生じたのです。

問題は、「知恵」や「知識」といったもの、それ自体が悪いと言っているのではありません。そうではなく、自分が知識に優れているということで他人を虐げ、他人より優位に立とうとする考えが生まれていたことに問題があったのです。そのように、「自分こそが優れている」と言って、他者を虐げ、支配するような考えをパウロは一九節で「悪賢さ」と表現しています。そのような悪賢い考えを働かす人たちに対してパウロは一八節で「本当に知恵のある者となるために愚かな者になりなさい」と忠告します。つまり、たとえ周囲の人々から「愚かだ」と見なされ侮られようとも、他人を見下したり虐げたりするよりはずっとましである、と言

うのです。この箇所を読んでいて、「キリスト教の教会でそのような他人を虐げたり、グループを作って仲違いするようなことが起こるなんて・・」と驚く方もいるかも知れません。しかし、ここに出てくるコリントの教会だけでなく、教会という場所はいつの時代にもこうした深刻な問題を抱えてきたと言えるかも知れません。何故かと言うと、教会は様々な年齢の人々、性別の違う人々、立場や考えの違う人々が集まる場所で、色々な人たちが集まっている場所であるからです。いわば、教会はこの社会の縮図とも呼べる場所と言えるのです。そこにおいて一人ひとりが抱え持つ普遍的な「罪」が露わにされるのです。

そうした色々な人たちが集まる教会、このコリント教会でパウロは一年六ヶ月の間、牧師として働きました。その後、パウロはギリシャからトルコへ渡り、エフェソという町の教会で働きます。ですが、そこでかつて自分が牧師として働いたコリントの教会で大きな問題が起こっていることを耳にします。「コリントの教会の人たちがグループを作って、争い合っているらしい」と。それを聞いたパウロはいてもたってもいられなくなり、この手紙をコリントの人々に書き送ったのです。もし、皆さんがそのような状況に置かれたら、どうするでしょうか？たとえば、クラブ活動やサークル、アルバイト先で自分のいない間に後輩同士がお互いにグループを作って、言い争いを始めたとします。そのことを聞かされた皆さんは、どのような言葉をその後輩たちに投げかけるでしょうか？パウロはいま起こっているそのようなトラブルのすべ

てが私たちの手に委ねられていることを語ります。それは言い換えるならば、それらの問題が良い方に運ぶか、悪い方に運ぶかは私たち次第であることを伝えています。しかし、いざそのように言われるとますます責任を感じてしまい、ついそうした問題から後ずさりしてしまいたくなるかも知れません。ですが、私たちがイメージするそうした「責任」とは異なり、パウロは二二節以降で「一切はあなたがたのもの」、「あなたがたはキリストのもの」、「キリストは神のもの」と、私たちの命を支配されるお方に一切の主権があり、私たちには依り頼むべきお方がいることをはっきりと告げるのです。二〇節でパウロが語る「主は知っておられる、知恵のある者たちの論議がむなしいことを」は、旧約聖書『詩編』九四編の引用です。そこでは、「知恵のある者たちの論議」は「人間の計らい」と表現されています。人は自分の思いや計らいによって、物事をより良く運ぼうと努めてしまいがちです。ですが、私たち人間がコリント教会のような不和の問題を抱えてしまった時、私たちは知らず知らずの内に「罪」の力に捕われてしまいます。それは最早、人間の力では解決することは不可能で、イエス・キリストに依り頼むことによってのみ、解決されるものです。パウロはこのお方に依り頼むことこそ、いま私たちが一番に成すべきことであると語るのです。

それと同時に、パウロはかつてイエス・キリストがどのような振る舞いをされたのかを私たちに指し示しています。『ヨハネによる福音書』一三章一節以降でイエス様が弟子たちの足を

洗う場面があります。弟子たちの足を洗い終えたイエス様は彼らに向かって「わたしがあなたがたの足を洗ったのだから、あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない。」と語ります。「足を洗う」というのは、この時代の風習で奴隷が主人に行っていた行為です。つまり、私たちはお互いに奴隷が主人に仕えるように、相手を敬いながら生きて行くことが大切である、と言っているのです。

その際、忘れてはならないことがあります。相手を敬う余り、自分に嘘をついて、無理な作り笑いを浮かべて生きていくことを勧めているのではありません。「だれも自分を欺いてはなりません。」とあるように、先ずは自分自身を心から許し、素直な気持ちで愛せることが必要となります。周りの人々に仕えようとする時、まず先にこの自分に仕えることが出来ていることが求められるのです。そのことが大切なメッセージとして語られているのです。

〈祈り〉

天の父なる神さま。

私たちは時に自分に嘘をついて、作り笑いを浮かべながら、周りの人たちとの関係を取り持とうとします。しかし、聖書は先ず私たちが救い主イエスに依り頼み、自分自身を心から愛することが出来て初めて、本当の意味でその人たちを受け入れることが出来るよう

になることを伝えています。どうか、いま自分のことで悩んでいる人、周りの人たちとの関係で悩んでいる人たちにあなたからの助けが豊かにありますよう、お祈りいたします。東北学院大学の学生の皆さんに祝福がありますように。大学で働く教職員お一人おひとりに豊かな恵みがありますように。このお祈りを救い主、イエス・キリストのお名前によってお捧げします。アーメン。

なぜ、怖がるのか

日本基督教団石巻山城町教会　関川祐一郎

マルコによる福音書　四章三五～四一節

35その日の夕方になって、イエスは、「向こう岸に渡ろう」と弟子たちに言われた。36そこで、弟子たちは群衆を後に残し、イエスを舟に乗せたまま漕ぎ出した。ほかの舟も一緒であった。37激しい突風が起こり、舟は波をかぶって、水浸しになるほどであった。38しかし、イエスは艫の方で枕をして眠っておられた。弟子たちはイエスを起こして、「先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか」と言った。39イエスは起き上がって、風を叱り、湖に、「黙れ。静まれ」と言われた。すると、風はやみ、すっかり凪になった。40イエスは言われた。「なぜ怖がるのか。まだ信じないのか。」41弟子たちは非常に恐れて、「いったい、この方はどなたなのだろう。風や湖さえも従うではないか」と互いに言った。

主イエスはガリラヤ湖に舟を浮かべ、舟の上から大勢の群衆に向かって「神の国の福音」を

宣べ伝えていました。夕方になって、主イエスは「向こう岸に渡ろう」と弟子たちに言われました。そこで、弟子たちは主イエスの言葉に聞き従い、群衆をあとに残し、主イエスの言われるままに沖へと舟を漕ぎ出しました。ガリラヤ湖はでは時たま激しい突風が吹き荒れました。特に気温が下がった日没以降に突風が吹くのです。主イエスの弟子たちの中にはペトロをはじめとして、何人かの漁師たちがいました。ガリラヤ湖は言うなれば、彼らにとってのホームグラウンドです。ですから、ガリラヤ湖のことは熟知していました。長年の経験から、熟練の漁師たちでさえこの突風には細心の注意を払っていました。

この日も漁師たちが恐れていた激しい突風が主イエスと弟子たちが乗った舟を襲いました。三七節にこう記されています。

「激しい突風が起こり、舟は波をかぶって、水浸しになるほどであった」。口語訳聖書は次のように訳しています。「すると、激しい突風が起こり、波が舟の中に打ち込んできて、舟に満ちそうになった」。舟をたたきつけるほどの激しい波が、突風によって主イエスと弟子たちの舟を襲ったのです。弟子たちは激しく動揺しました。弟子たちはこのとき深刻な危機に直面しています。自分たちの命の危機に直面しているのです。漁師としても、このまま舟を沈ませるわけにはいきません。

この危機は主イエスの言葉に従ったがゆえに直面しなければならないものでありました。弟

子たちがもし、「向こう岸に渡ろう」という主イエスの言葉に対して、「突風に吹かれる危険がありますから、今はやめた方が良いでしょう」と進言していたならば、直面することのなかった危機です。もっと言うならば、主イエスと歩みを共にしていなければ、このような危険に遭遇することはありませんでした。実際にガリラヤ湖畔にいた大勢の群衆たちは何事もなく、家路についているのです。

この危機に直面した弟子たちは動揺し、恐れました。このとき弟子たちは、なぜ恐れたのでしょうか。それは自分たちの舟に一緒に乗っておられる主イエスを本当に信じることができなかったゆえの恐れでありました。主イエスが神と等しい権威をお持ちのお方として、この世のすべてをご支配しておられる。このことに対する信頼が欠けていたのです。命の危機の中で慌てふためき、恐れの中にある弟子たちとは対照的に、主イエスは何事もないかのように、舟の中で眠っておられました。そのため、弟子たちは主イエスに向かってこう言い放ちました。

「先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか。」

そもそも主イエスが「向こう岸に渡ろう」というから沖へと漕ぎ出したのです。それなのに、この苦難に手を差し伸べてくださらない、このような感情が弟子たちの心を支配しました。すると、主イエスは起き上がって、風を叱り、湖に向かって「黙れ、静まれ」とただ一言おっしゃいました。するとどうでしょうか。風はやみ、湖はすっかり凪になったのです。主イ

エスは弟子たちに向かって問いかけます。

「なぜ怖がるのか。まだ信じないのか。」

主イエスは天地の造り主なる神さまと等しい権威をお持ちです。だからこそ、突風が吹き荒れて、舟が沈みそうになっても、まったく恐れを抱きません。弟子たちはこのことを理解していませんでした。それゆえに、本来恐れる必要などないものを彼らは恐れ、動揺してしまったのです。この弟子たちの姿は私たち自身の姿でもあります。すべてを支配しておられる主が共におられながら、襲い来る苦難や試練にうろたえて、恐れを抱いてしまいます。主イエスはどこに行ってしまったのか。この危機的状況の中で、主イエスは眠っているのだろうか。時にわたしたちはこのような疑いや戸惑いを経験することがあるでしょう。信仰を与えられ、主イエスと歩みを共にしていると思っていた弟子たちでさえ、本当の意味で主イエスを信じ、信頼していませんでした。しかし、この危機を通して主イエスは大切なことを彼らに、そしてわたしたちに伝えてくださるのです。

「なぜ怖がるのか。まだ信じないのか。」

この主イエスの言葉は言い換えれば、「怖がる必要はない。私を信頼しなさい」という主イエスご自身の招きの言葉です。わたしたちの舟に主イエスが乗り込んでくださっています。そして「向こう岸へ渡ろう」と呼び掛けてくださっている。わたしたちの人生の旅路において、

たとえ激しい突風が吹き荒れ、舟が沈みそうになったとしても、その舟の中にすべてを支配しておられる主イエスが乗っていてくださる。今日のみ言葉を通して、わたしたちは改めてこの恵みを知らされています。もうすぐクリスマスを迎えます。クリスマスの出来事はまさに、主イエスがわたしたち人間を罪の支配から解き放つために、真の救い主としてこの地上に降ってくださり、わたしたちの舟に乗り込んでくださった出来事です。わたしたちが本当により頼み、信頼すべきお方はこのお方なのです。

襲い来る大波によって舟の中に入り込んでくる水があるかもしれません。そのようなとき、わたしたちはたった一人で、自分の力にだけより頼んで、その水を必死に外にかき出す必要はありません。その舟に乗り込んでくださっているお方がおられる。わたしたちと共におられる主イエスにこそ、すべてを委ね、より頼んで生きるように、そして、恐れることなく安心して主イエスに委ねて生きるように、主イエスはわたしたちを一人一人を招いてくださっているのです。

『神の愛』をいただいて愛し合う

日本基督教団　平　賀　真理子

ヨハネによる福音書　一三章三四～三五節

34あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。35互いに愛し合うならば、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、皆が知るようになる。」

東北学院の３Ｌ精神［LIFE, LIGHT, LOVE］のうちのLOVEについてお話しします。「LOVE」というと、現代の日本社会にいる私達の多くは、恐らく「恋愛」を連想してしまう方が多いのではないかと思います。もちろん、英語の「LOVE」は、恋愛だけを指すのではなく、親や子、また祖国に対する「愛」を指す場合もありますが、日本社会の中では、恋愛に焦点が当たってしまっている感じがどうしても否めません。

ところが、新約聖書でいうところの「LOVE」の多くは、実は「神の愛」を指すことがほとんどです。すでに習っている方も多いと思いますが、新約聖書の原語であるギリシア語、そこ

では、「神の愛」を「アガペー」という単語で表します。今、お読みした聖書箇所でも、「互いに愛し合いなさい」という言葉は、その「アガペー」をもとにした「動詞＝アガパオウ」が使われています。ですから、「恋愛」のように、自然に湧いてくる好きという感覚に任せた愛とか、共通体験によって湧いてくる友情とか言ったもの、つまり、人間が自分の感情に突き動かされて生じる「愛」で愛し合うといったことを、イエス・キリストが弟子達に求めているわけではありません。

「神の愛」「アガペー」で愛し合うことが、イエス・キリストの弟子達が守るべき掟であり、この箇所で初めて、お弟子さん達に明確に提示されました。それ以前のユダヤ教で掟と言われた「十戒」に代わるものが、ただ一つ、「神の愛で愛し合う」という「新しい掟」として宣言されたわけです。

では、その「神の愛」とは、人間の感情からくる「愛」と、どういう違いがあるのでしょうか。今日は二つ挙げます。一つは、自己犠牲の性質です。今日の箇所の前半で、イエス・キリストは御自分が十字架で死んで、この世から「天」に移される時が近づいていると自覚しておられるとわかります。それは、御自分が罪を犯したせいではもちろんありません。イエス・キリストは、「神の御子・救い主」として、人間達の罪を引き受けて、その身代わりとして命を献げる役割を担うように、神様に定められていることを悟って、その使命に従っていかれたの

でした。イエス・キリストのそのような歩みが「アガペー」を体現しています。イエス・キリストはいつも「父」と呼ぶ神様の御心に従うことを自分の第一の使命と考えていることが福音書に書かれています。一方、神様が何を大事になさるのかを考えなくても生きていけると思ってしまうのが、罪深い人間です。そのような人間は、そのままならば、神様にとって、価値がないと思われてしまってもいいような存在です。それにも関わらず、イエス・キリストは、人間達が神様の平安のもとで生きられるようになるために、罪の贖いをする道を歩んだのです。このように、「神の愛」である「アガペー」は自己犠牲をいとわないのです。

また、「アガペー」のもう一つの特徴は、「奉仕する愛」だということです。三四節「あなたがたも互いに愛し合いなさい」の直前に、「わたしがあなたがたを愛したように」とあります。それが具体的には何を指すのかわかるのが十三章の最初の箇所です。イエス・キリストが弟子達の足を洗った出来事です。「足を洗う」仕事は、当時のユダヤ社会では、奴隷の仕事と位置付けられていました。けれども、死期を悟ったイエス・キリストが、目下とも言うべき弟子達の足を洗う奉仕をしました。それは、御自分がいなくなった後の弟子達の学びのためでもありました。弟子達に「神の愛」で愛するとは、互いにへりくだって奉仕し合うような愛し方であると教えようとされたのだと思われます。

実は、神様の愛である「アガペー」の特徴については、新約聖書の別の箇所、コリントの信

徒への手紙一の一三章四節から八節に書かれているので、ぜひ、後でお読みください。その一部分を紹介すると、「神の愛」は「忍耐強い、ねたまない、高ぶらない、自分の利益を求めない、いらだたない、恨みを抱かない」などなど・・。自分が「愛」と信じて実行してきたものが、聖書が語っている「神の愛」とは全く異なっていて、自分がいかに「本当の愛」というものを錯覚して生きてきたかを思い知らされます。

これは、私だけというよりも、神様に従って生きることを知らない人間なら、仕方ないとも言えます。神様抜き、神様なしの人間は、いくら頑張っても、所詮、ほころびだらけの小さな存在です。人間がいくら取り繕っても、無限で全知全能で憐れみ深い神様の愛を、自分だけで生み出すことはできません。人間はまずは、聖書で語られている神様が自分を愛したいと切望なさっていると知り、それを体験することによって満たされます。そこから、神様が自分に求めておられる働きへと突き動かされていきます。二十世紀で一番有名な修道女であるマザー・テレサも、毎日礼拝を献げて「神の愛」をいただくことで、瀕死の人々の尊厳のために奉仕することができると語ったと伝えられています。

話をイエス・キリストと弟子達の出来事に戻しましょう。弟子達は、「主が自分の足を洗ってくださったほどに愛された」出来事を体験して、「神の愛」に満たされたはずです。そして、主の十字架の後、そのような「神の愛」を知っている者達として、自己犠牲、または奉仕

する愛を基盤としたグループを作り、教会となっていきました。教会に集う人々が「主」と仰ぐイエス・キリストが本物の救い主だと、この世に証しを広めていき、キリスト教が世界に広まりました。

皆さんも、キリスト教を建学の精神としている、この東北学院大学で、福音に触れ、神様が自分を愛しておられることを知らされています。在学中に、どうぞ「神の愛」即ち、「アガペー」を、より一層実感できるように導かれ、その恵みから力をいただいて、神様の喜ばれる方向へ歩みを進められるよう、祈ります。クラスメートや友人同士で、「神の愛」によってお互いを尊重し合う体験を積んだのち、主の弟子達のように、この世に向かって「神の愛」を実現して広める者として、神様に豊かに用いられますよう、祈ります。

キリストとの出会い

東北学院中学校・高等学校　宗教主任　松井浩樹

マルコによる福音書　一四章三～九節

3イエスがベタニアで重い皮膚病の人シモンの家にいて、食事の席に着いておられたとき、一人の女が、純粋で非常に高価なナルドの香油の入った石膏の壺を持って来て、それを壊し、香油をイエスの頭に注ぎかけた。4そこにいた人の何人かが、憤慨して互いに言った。「なぜ、こんなに香油を無駄遣いしたのか。5この香油は三百デナリオン以上に売って、貧しい人々に施すことができたのに。」そして、彼女を厳しくとがめた。6イエスは言われた。「するままにさせておきなさい。なぜ、この人を困らせるのか。わたしに良いことをしてくれたのだ。7貧しい人々はいつもあなたがたと一緒にいるから、したいときに良いことをしてやれる。しかし、わたしはいつも一緒にいるわけではない。8この人はできるかぎりのことをした。つまり、前もってわたしの体に香油を注ぎ、埋葬の準備をしてくれた。9はっきり言っておく。世界中どこでも、福音が宣べ伝えられる所では、この人のしたことも記念として語り伝えられるだろう。」

今日お読みしました前後の記事は「イエス殺害の計画」と「弟子のユダによる裏切りの企み」でありますから、いよいよ福音書もクライマックスである十字架物語へと進むことがわかります。その悲しみの極地に向かう中、ベタニアという村で「一人の女」としか記されない匿名の女性が突然、高価な香油を主イエスの頭に注いだという大変に美しい物語が挿入されています。

そこでまずこの物語で際立つのは、主イエスとこの女性の出会った「場所」と「状況」であります。主イエスはベタニアの「重い皮膚病の人シモンの家にいて、食事の席に着いて」いました。「重い皮膚病」は当時のユダヤ教社会で、最高度の祭儀的な「けがれ」と見なされました。この思い皮膚病を患った人が触った「もの」にふれるだけで、その「けがれ」が伝染すると考えられるほどでありました。ですからそのシモンが住んでいたベタニアという村全体が、社会的に見棄てられていた人々の暮す場所、そのものであったと想像することも大いに可能であります。

そういうけがれているとされていた場所に行っただけでも驚くべき出来事であり、さらに主イエスはそのシモンの家で食事をします。学食で楽しく食事をする皆さんからは想像することも難しいと思われますが当時のユダヤ社会では、どの食材を、誰が、どのような手順で調理し、どのような食器に盛り付けて、誰といっしょに食べるかは大変重要な問題であったので

す。したがってまず重い皮膚病の人の家に入ったことだけで驚きの行為であって、さらにその家で調理された食事を食べるとは、本来は全く考えられない出来事であったことがわかるのです。

そこである一人の女性の行為が始まります。「非常に高価なナルドの香油の入った壺を持って来て、それを壊し、香油をイエスの頭に注ぎかけた」のです。「ナルド」とは、インド原産の植物（日本名「甘松香」）の根っこから調合される高価な油のようであります。「三百デナリオン以上」の価値とありました。労働者のおよそ一年分の給与、つまり現代に換算すると何百万円もの価値に相当すると考えられます。彼女はこの壺を「壊し」て、つまり一壜の香油をすべて主イエスの頭に注ぎました。

香油を注ぐことには、いくつかの意味があります。まずは客人をもてなし、好意を示すことを意味します。また、死者の遺体に注ぐことにも使いました。弔いの儀式を行うためであります。そして何よりも、神から使わされた代弁者、救い主、メシアとして聖職者任命式の際も使用された香油であります。やがて十字架で死にゆくイエスこそがメシア（キリスト）であるという意味が、ここで暗示されているのです。

では、この名前も記されないある女性は、高価な香油を注ぐだけの何不自由のない裕福な生活を送っていたのでしょうか。そうではないでしょう。おそらく私達が想像するよりも厳しい

現実の生活を余儀なくされていたと思われます。そもそも彼女もベタニアに住んでいた、つまりこの女性も何かしらの事情があったと思われます。重い皮膚病のシモンの家にいたことからも同じく蔑視され、通常の社会生活は送れてはいなかったでしょう。そして実際、彼女は生涯を終えるまで、あるいはその家族、関係者、親族までもが生涯、厳しい生活であったことと思います。

しかし、キリストと出会い、彼女ができる限りの行動を通してもてなしました。ただ、そのキリストに出会ったおかげで、生活そのものに劇的な変化がもたらされたことはなかったでしょうし、やはり引き続いて大きな変化はなく、そのまま生涯、困難な生活を送ったと思われます。ただ、そのキリストとの生涯一回だけ、時間にしてもそんなに長時間ではなかった出会いと思われます。ただ、その出会いの中で彼女は「できるかぎりのこと」を通してイエス・キリストをもてなし、世話をしたのであります。厳しい生活そのものに大きな変化はなかったにしても、誰かに何かを言われようとしてもキリストと出会い、僅かな時間だけれども一緒にいることができた、それを決して忘れることのできない尊い、満たされた時を生涯忘れることなく過ごしたのではないでしょうか。

私たちは、どのように生きていくのでしょうか。目に見えることのみに終始し、右往左往して誠に不安定に生きるしかないのでしょうか。そうではありません。しっかりとした聖書の言

葉という土台があればこそ、そこで日々繰り返されるキリストとの出会いがあり、豊かに生きることは可能であります。要するに今日の物語、私達の「生きる質」、生きている内容、生きる中身が問われているのであります。右往左往する生き方ではなく日々、聖書の言葉に聴きつつキリストとの出会いを貴重な時として確かな歩みを続けたいと思います。

祈り

主なる神様、礼拝の一日を感謝いたします。

主イエスの姿を通して、私たちに「生きる」道を示し続け、それをたしかに受け取って日々の歩みを続けさせて下さい。主の御名によって祈ります。アーメン。

今日、救いがこの家を訪れた

東北学院榴ケ岡高等学校　宗教主任　西間木　順

聖書　ルカによる福音書　一九章一～一〇節

1イエスはエリコに入り、町を通っておられた。2そこにザアカイという人がいた。この人は徴税人の頭で、金持ちであった。3イエスがどんな人か見ようとしたが、背が低かったので、群衆に遮られて見ることができなかった。4それで、イエスを見るために、走って先回りし、いちじく桑の木に登った。そこを通り過ぎようとしておられたからである。5イエスはその場所に来ると、上を見上げて言われた。「ザアカイ、急いで降りて来なさい。今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい。」6ザアカイは急いで降りて来て、喜んでイエスを迎えた。7これを見た人たちは皆つぶやいた。「あの人は罪深い男のところに行って宿をとった。」8しかし、ザアカイは立ち上がって、主に言った。「主よ、わたしは財産の半分を貧しい人々に施します。また、だれかから何かだまし取っていたら、それを四倍にして返します。」9イエスは言われた。「今日、救いがこの家を訪れた。この人もアブラハムの子なのだから。10人の子は、失われたものを捜して

救うために来たのである。」

今日共に読みました箇所は、徴税人ザアカイの話です。

エリコという町に徴税人の頭であるザアカイがいました。徴税人とは、聖書の巻末にある用語解説によれば、「ローマ政府あるいは領主から税金の取り立てを委託された役職。異邦人である外国の支配のために働くばかりではなく、割り当てられた税額以上の金を取り立てて私腹をこやすという理由で、ユダヤ人から憎まれ、「罪人」と同じように見なされて」いました。ザアカイは、徴税人の頭でしたから、莫大な財産があり、裕福な生活を送っていました。しかし、ザアカイには友と呼べる人がいなかったのではないでしょうか。かえって同じユダヤ人から裏切り者とみなされていたのです。

さて、主イエスがエリコの町をお通りになることが、ザアカイの耳に入ってきました。ザアカイは主イエスを一目見たいと思いました。ザアカイは、主イエスがお通りになる通りに出かけて行ったのですが、すでに大勢の人たちが集まってきており、人垣ができていました。ザアカイは背が低かったので、後ろの方から見ることができなかったのです。もしかすると、前の方へ行こうとしたかもしれません。しかしザアカイを快く思っていない人たちに、遮られて、前の方へ行くことができなかったと思います。それでもザアカイはあきらめなかったので

す。主イエスを一目見たいという思いが、ザアカイを駆り立てたのです。「通りには大きないちじく桑の木がある。そのいちじく桑の木に登れば、身を隠しながら、主イエスを見ることができる。」ザアカイはそう考えて、そのいちじく桑の木に登ったのです。ところが、ザアカイにとって予想していなかった出来事が起こりました。主イエスが、ザアカイが登っているいちじく桑の木に近づいてこられたのです。そしてザアカイの方へ目を向けて、「ザアカイ、急いでおりて来なさい。今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい。」と言われたのです。この主イエスの言葉は、ザアカイの存在を認め、友となってくださったこと、と同時にザアカイに「あなたも神に愛されているのだ」ということを伝えている言葉なのです。ザアカイは、自分の方へ近づいて来られた主イエスを通して、自分も神に愛されていることに気づくことができたのです。主イエスの語りかけを通して、神に愛されていることに気づいたザアカイは、その愛に応えようと、生き方を変える決断をしたのです。つまり神の御心を自分の心として生きる生き方、神の愛中心の生き方をしていこうと決断したのです。

「主よ、わたしは財産の半分を貧しい人々に施します。また、誰かからだまし取っていたら、それを四倍にして返します。」主イエスとの出会いの喜びに満たされたザアカイは、その喜びを他の人たちに伝える者となったのです。

このザアカイの言葉を聞いた主イエスは言われました。「今日、救いがこの家を訪れた」。救

いとは、神との愛の関係の中で生きていることに気づかされること、ということができます。この「今日、救いがこの家を訪れた」が、クリスマスの意味ではないかと思うのです。クリスマスの出来事を通して、私たち一人ひとりが神から分け隔てなく愛されていることに気づくことができます。神の愛が私たち一人ひとりの心の中に注がれていることに気づくことができます。その神の愛は、私たちを新しく造り変え、神のみ心を自分の心として生きるように促していることに気づきます。これがクリスマスの喜びではないでしょうか。その喜びに満たされた私たちは、いまだ困難な生活を送っている人たちに、生きることに絶望をしている人たちに、深い悲しみの中にある人たちに、このクリスマスの喜びを伝えていく者でありたいと思うのです。

＜祈り＞

父なる神

新しい命を与えてくださり、この学校へと招いてくださり、感謝いたします。

あなたの招きによって、ともに礼拝をささげることができますことを感謝いたします。

私たちは今、アドベントの時を過ごしております。どうぞクリスマスの意味を静かに思い起こすことができますように。そして私たち一人ひとりが、クリスマスの喜びを他の人

たちに伝えていくことができますように。

今　この場におりません友のために祈る心を与えてください。

すべてのことを当たり前だと思うのではなくて、どんなことにも感謝する心を与えてください。

この学校に集う者すべてが、今日もこの学校に来てよかったと思える一日に共にしていくことができますように。

この祈り　尊いわれらの主　イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。

いかなる場合にも対処する秘訣

宗教部長　野村　信

フィリピの信徒への手紙　四章一〇～一三節

10さて、あなたがたがわたしへの心遣いを、ついにまた表してくれたことを、わたしは主において非常に喜びました。今までは思いはあっても、それを表す機会がなかったのでしょう。11物欲しさにこう言っているのではありません。わたしは、自分の置かれた境遇に満足することを習い覚えたのです。12貧しく暮らすすべも、豊かに暮らすすべも知っています。満腹していても、空腹であっても、物が有り余っていても不足していても、いついかなる場合にも対処する秘訣を授かっています。13わたしを強めてくださる方のお陰で、わたしにはすべてが可能です。

長く大学に勤めていますと、それなりに、私のところに本学で学んだ卒業生たちが訪ねてくれます。それほど頻繁ではないのですが、ぽつぽつとやってきます。それは懐かしく、うれしいのですが、何かしら悩みや問題を抱えている場合があります。順調に行っている人は、夢中

に日を過ごしているからなのでしょう、そういう人は、あまり連絡がありません。しかし、卒業生たちから連絡があると、とにかく相談に乗るようにしています。

以前に来た卒業生は、離職して、今実家で何もしていないという人でした。話を聞くと、職場の人間関係が嫌になって、仕事を止めてしまったということです。家の方でも、あまりうるさいことを言わないので、家でのんびりして過ごしていると言っていました。一緒に来たもう一人の卒業生が、「この人は仕事を止めて時間を買ったのです」とうまくフォローをしていましたが、しかし、ずっと親元にいるわけにはいきません。切羽詰まるまで動かないのか、何か仕事をしたくなるきっかけを待っているかのようでもありました。

ところで、その人は、私にポツリと尋ねたのです。「キリスト教では、人間はどう生きたらいいとか、何か言っていますか」と。私は、長年キリスト教について教えてきた者として、少々がっかりしましたが、しかしあまり力まないで、「聖書は、私たちがしっかり生きて働き、しかも周りの人々に気遣ったり、助けたりして生きることを期待していますよ」と答えました。

しかし、問題は、もっと根深いというか、私たちみんなに共通するテーマがここにあると言えます。職場の人間関係が嫌になったというこの人の言葉の中に、職場の人々に何か期待があり、つまり人間関係はこうあるべきだという期待があり、さらに、人間関係が悪いならば仕事

を止めて、去っていく当然の理由がある、と言わんばかりです。

その時、とっさに言えませんでしたが、どうして、君が良い人間関係を築くように努力しないのか、悪い人間関係を良くするように努めないのかと言いたかったのです。すると、「そんなの無理だ」という声が返ってきそうです。しかし、他人はこうあるべきだとか、みんなはこうでなければならないと、実は、私たちは人々に対して強い期待や要求をもっています。

身近なことで言えば、近くの公園に行ったらゴミがちらかっていて、「公園が汚い、公園はみんなのものだからきれいにすべきだ」と言うのと似ています。気づいた自分が公園に行って掃除してみよう。確かに、私たちは、こうあるべきだ、とすぐに客観的に見て、もっともな講釈を垂れますが、実は、気づいた私たちが腰を上げて、ごみ袋をもって出かけるという選択肢があります。

もう何年か前のことですが、研究室の隣にいた先生が、私にこんな話をしてくれました。この間来たゼミ生が、いつも不機嫌で、やる気がないと言うので、どうしてかと理由を尋ねたら、そのゼミ生が、「大学がつまらなくてたまらない」とぼやいたというのです。そこでその先生は、「つまらないのは、お前だ」と言ってやった、と笑いながら私に話してくれました。ここにも、同じことが言えます。

私たち自身が変わる努力をしたいのです。私たち自身が、腰を上げて良くなるように取り組

めないでしょうか。それぞれには与えられた環境があり、その環境が気に食わないとか、人間関係が悪いとか、公園や道路が汚いとか、いろいろ周りを批判することはできますが、問題があれば、私たちが知恵を絞り、心を遣い、よくなるように努力し、忍耐して良い道が開かれるように努める道があるのです。

本日の聖書の一一節に「わたしは、自分の置かれた境遇に満足することを習い覚えた」とパウロは言っています。つまり、どんな環境にあっても、良くしようと努力し、しかも良くすることが出来たと言っています。すなわち、「貧しく暮らすすべも、豊かに暮らすすべも知っています」と。本日の話の脈絡で、これに続いて言えば「職場の人間関係が悪くても、良くても、公園や道路か汚かったら、自分で行ってきれいにして、気持ちよくできるし、さらに、周りがつまらなく、不自由に見えても、それを楽しい、喜ばしいものへと変えて生きるという努力をした」ということです。神が、強めて下さった、神が私の背を押して下さった、ということでしょう。パウロは、こうして地中海の東海岸を三回も回って、教えを宣べ伝えてきたわけです。

ここには、どんな境遇、環境にあっても、より良いものに向かって行こうとする積極的な人間の生き方があります。それは、周りの人々や与えられた環境に、失望し、批判をするだけではなく、自分が先頭に立って、良い方向へ向かうように努めた人の満足感が満ちています。い

わく「いついかなる場合にも対処する秘訣を授かっています」と。

本日は、最近あった身近なことでお話ししました。聖書は、人間の生き方について非常に詳しく語っている書物です。どうか、私たちがより良く生きるために、聖書が示す良い人間関係の作り方を学んでください。その中心には、人間に寄り添い、人間の悲しみ苦しみを担い、様々な問題と取り組んでくださった主イエス・キリストがおられるのです。その方は、最も避けられない、最後の壁である死をも、他者なる私たち人間のために命を投げ出し、私たちが新しく希望を抱いてしっかり生きることが出来るようにしてくださいました。そこにキリスト教の生き方の出発点があります。

愛の証し

大学宗教主任　阿久戸　義　愛

マタイによる福音書　第一章一八～二五節

18イエス・キリストの誕生の次第は次のようであった。母マリアはヨセフと婚約して
いたが、二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。
19夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそか
に縁を切ろうと決心した。20このように考えていると、主の天使が夢に現れて言った。
「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によっ
て宿ったのである。21マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子
は自分の民を罪から救うからである。」22このすべてのことが起こったのは、主が預言
者を通して言われていたことが実現するためであった。23「見よ、おとめが身ごもって
男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」この名は、「神は我々と共におられ
る」という意味である。24ヨセフは眠りから覚めると、主の天使が命じたとおり、妻を
迎え入れ、25男の子が生まれるまでマリアと関係することはなかった。そして、その子

をイエスと名付けた。

「あなたは誰ですか？」。そう聞かれたら、普通は「私は○○です」と、自分の名前を答えると思います。名前は、差し当たって自分が誰であるかを伝えるものです。でも、私はどうしてそういう名前なのでしょう？　親がそうつけたから？　では、自分の名前がどういう意味なのか、どうしてそういう風に名付けられたのか、ご両親に聞いたことがあるでしょうか。きっと、ご両親や名付け親が、何らかの願いや思いを込めて、こんな人になるように、よい人生を生きるようにと、そういう名前をつけてくださったのだと思います。

クリスマスに、私たちはイエス・キリストのお誕生をお祝いします。なぜでしょうか。イエス・キリストとは、いったい私たちにとってどういう方なのでしょうか。それは、キリスト教信仰の根本的な問いです。その答えは聖書全体を通して学ばれるべきものですが、特に今日の聖書の箇所、ヨセフとマリアの間に生まれた一人の幼子がイエスと名付けられる場面、そしてその子が「インマヌエル」と呼ばれるという記述から、学ぶことができます。

クリスマス劇の主役は、聖霊によってキリストを身ごもった、マリアです。しかし、その夫ヨセフについては、聖書にはあまり詳しく書かれていません。ヨセフは、イエスの生涯の物語の最初の方に少しだけ現れて、たちまち消えてしまいます。そして、福音書の中にはそれ以後

現れてきません。ヨセフは脇役です。それでも、ヨセフなしには、「一人の幼子がわたしたちのために生まれた」というクリスマスの喜びはなかったのです。今日はそんなヨセフの話です。

ヨセフとマリアは互いに愛し合っていて、結婚の約束をしていました。ヨセフは幸せでした。結婚を目前に控えた人たちは本当に幸せそうに見えるものです。それぞれ別々に歩んできた一人と一人が、これから先、二人で一つになり、喜びも悲しみも分かち合いながら歩んでいく、という夢と希望に満ちあふれているのです。その光景は、二人を見ている友人たちまで幸せな気分になるくらい、晴れやかなものです。ヨセフとマリアもそんな幸せの絶頂にいました。ところが、信じられないことが起きました。婚約期間中に、マリアは懐妊したのです。それは、聖霊がマリアの身体に入ったのであり、そのことを告げた天使の説明をマリアは受け入れました。マリアはヨセフにも、自分が天使から告げられたことを伝えたでしょう。でも、ヨセフにそれをすぐ信じろ、というのは無理な相談でした。いったい誰がそんな話をすぐに信じられるでしょう。第一、天使から直接説明を受けたマリア自身も、最初はとても信じられないことだったのです。

ヨセフはただただ悩み続けました。ヨセフはきっと、マリアの話をすぐには信じられず、それでもマリアが浮気をするような人だとも思わなかったでしょうから、恐らくはイスラエルを

占領していたローマの兵隊か悪い人に乱暴されたのだろうと考えたのではないかと思います。結婚前にマリアが妊娠したことは、律法違反です。当時の律法に従えば、マリアは姦淫した女となり、石打の刑にされてしまいます。ヨセフは聖書に従って生きようと努力する正しい人でしたが、また心優しい人でもありましたので、マリアのことを表沙汰にして、彼女が石で撃ち殺されることはとても堪えられませんでした。悩んだ挙げ句、ヨセフはマリアと密かに縁を切る決意をしました。そうすれば、マリアは子どもを妊娠していたのに酷い男（ヨセフ）に捨てられた可哀想な女として、みんなから同情され、死刑は免れるだろう、そう思ったのでしょう。ヨセフは結婚を前にして、幸せの絶頂にあったのに、今でもマリアのことが大好きなのに、マリアのために自分が悪者になろうとしたのです。それはヨセフがすべての罪を引き受けて、自分が悪者とされてもマリアを救いたいという、心を引き裂かれるような決断でした。それは、ヨセフのマリアへの最大の「愛」の現れでした。

そのような絶望的な、そして大いなる愛の決断をしたヨセフに、神様は天使を通して語りかけます。「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである」。幸せの絶頂から絶望の淵に叩き落とされたヨセフに、神様は「心配しなくてよい」と語られます。そして、マリアは不義を犯したのではなく、神様がマ

リアとヨセフの間に働かれて、神様のご意思で、神様の一人子がこの世にお生まれになることを伝え、その器として二人を用いることを告げられたのです。律法によって心から愛する人を失おうとしていたヨセフに、そして絶望的な状況でもどんなことがあってもマリアを愛し守ることを決意したヨセフに、神様の大きな愛が注がれて、二人は救われたのです。

神様はその子どもを「イエス」と名付けるように言われました。「イエス」という名はヘブライ語のヨシュア（神は我が救い）のギリシア語訳です。神様は私を救ってくださる、必ず！という意味です。また、その子は「インマヌエルと呼ばれる」と書いてあります。それは、「神はわれらと共に」、神様は私たちといつでも一緒におられる、という意味です。生まれてくる御子は、その名前のとおり、神様がいつでも私たちと一緒にいてくださる、という約束の証しでした。どんなことがあっても、あなたを見捨てたりしない、愛し続ける、という神様の愛の証しです。神様がその名を幼子につけるように言われた時、ヨセフは、生まれてくるその子が何者であるのかを知らされるのです。私を救ってくださる方。救い主なる神の一人子、キリストであると。ヨセフは眠りからさめた後、安心してマリアを妻に迎えることができました。

神様は私たちを放っておかれません。ヨセフがマリアを石打の刑に送ることができず、自らが悪者となって痛みを負うことを辞さなかったように、神様は私たちが罪にとらわれて亡びるのを放っておかれません。そして、そのようにして神様はキリストと共に十字架の上で苦しま

れました。どんなときでも私たちを愛してくださることを決意してくださいました。そして、その愛の証しとして、このクリスマスに「幼子がわれらに生まれた」のです。マリアとヨセフの二人の間に、また私たちも含めたすべての人間の間に、一人の御子がお生まれになったのです。

クリスマスは御子キリストを迎える準備をする季節です。私たちの心の中にイエス様をお迎えする準備をしたいと思います。そして、いつでもインマヌエルと呼ばれる方、イエス様が、私たちと共にいてくださり、私たちを救ってくださることを覚えて、いつも祈り、ヨセフのように神の言葉に聞き従っていきたいと思います。

正義の救い主とは？

大学宗教主任　木村純二

『旧約聖書』「イザヤ書」一一章一～五節

1エッサイの株からひとつの芽が萌えいで／その根からひとつの若枝が育ち、2その上に主の霊がとどまる。知恵と識別の霊／思慮と勇気の霊／主を知り、畏れ敬う霊。3彼は主を畏れ敬う霊に満たされる。目に見えるところによって裁きを行わず／耳にするところによって弁護することはない。4弱い人のために正当な裁きを行い／この地の貧しい人を公平に弁護する。その口の鞭をもって地を打ち／唇の勢いをもって逆らう者を死に至らせる。5正義をその腰の帯とし／真実をその身に帯びる。

本日の聖書個所は、『旧約聖書』の中で、いつの日か来ると信じられていた救い主について語られた箇所の一つです。「ローマの信徒への手紙」一五章には、イエスこそが約束された救い主である事を示す箇所として、この「イザヤ書」一一章が挙げられています。

それでは、イスラエルの民が待ち望んでいた救い主とは、どのような存在だったのでしょう

か。その性質を示す言葉を拾ってみると、「知恵」「勇気」「正義」といった言葉が見つかります。「知恵と勇気を兼ね具えた正義の救い主」と言われて、みなさんはどのような人を思い浮かべるでしょうか？

日本には、仮面ライダー、ウルトラマン、戦隊ヒーローなど、たくさんの正義の味方・ヒーローがいます。みんな愛と正義を守るために、悪と戦い、必殺の技や武器を使って敵を倒します。「知恵と勇気を兼ね具えた正義の救い主」と言うと、そうした正義のヒーローを思い浮かべるかもしれません。そうした正義の味方の中でも、日本の子どもたちが一番最初に馴染み、覚えるのがアンパンマンではないかと思います。愛と勇気が友だちのアンパンマンは、いつも悪さばかりしているバイキンマンを必殺アンパンチで吹っ飛ばします。しかし、そこで描かれる「正義」とは一体何なのでしょう。

実は、最初に出版された絵本の『あんぱんまん』は、そういうお話ではありませんでした。基本的には、お腹を空かせた人のところにアンパンマンが行って、自分の顔を食べさせる、ただそれだけのお話です。私は、小学生のころ、初めて絵本版『あんぱんまん』を読んで、主人公が「さあ、食べなさい」と言って自分の顔を食べさせる、ある意味では非常にグロテスクな表現に大変衝撃を受けたのを今でも覚えています。さらにまた、絵本の最後に載せられた作者やなせたかしの「あとがき」にも子どもながらに心動かされました。

子どもたちとおんなじに、ぼくもスーパーマンや仮面ものが大好きなのですが、いつもふしぎにおもうのは、大格闘しても着ているものが破れないし汚れない、だれのためにたたかっているのか、よくわからないということです。

ほんとうの正義というものは、けっしてかっこうのいいものではないし、そしてそのためにかならず自分も深く傷つくものです。そしてそういう捨身、献身の心なくしては正義は行えませんし、また、私たちが現在、ほんとうに困っていることといえば物価高や、公害、飢えということで、正義の超人はそのためにこそ、たたかわねばならないのです。

あんぱんまんは、やけこげだらけのボロボロの、こげ茶色のマントを着て、ひっそりと、はずかしそうに登場します。それでも顔は、気楽そうに笑っているのです。

さて、こんな、あんぱんまんを子どもたちは、好きになってくれるでしょうか。それとも、やはり、テレビの人気者のほうがいいですか。（『あんぱんまん』フレーベル館、一九七六年）

その後、私が高校生の時にテレビアニメの「アンパンマン」の放送が始まりました。絵本とは違い、バイキンマンを敵に回して必殺アンパンチを繰り出すアンパンマンは、瞬く間に「テレビの人気者」になってゆきます。しかし、その人気とは裏腹に、それを見る自分の心は、どこか寂しく悲しい気持ちでした。

聖書の話に戻りましょう。先ほどのお読みした「イザヤ書」一一章では、来るべき正義の救い主は、「弱い人」「貧しい人」を守るのだということが語られています。もちろん、テレビの中の正義のヒーローも弱い人を守っているはずなのでしょうが、ストーリーや映像の中心は「弱い人を守ること」よりも「強い敵を倒すこと」の方にあるので、やなせたかしの言うようにいったい誰のために戦っているのか、実はよく分かりません。また、その救い主が敵を倒すために用いる武器は「口の鞭」だと書かれています。これは要するに「言葉」のことで、「神の言葉を伝えること」を唯一の武器に敵と戦うわけです。

「口の鞭」を武器に「弱い人」「貧しい人」を守るというのは、まさにイエスの生き方でした。その結果イエスは、十字架で処刑されてしまいます。救い主を待ち望んでいたユダヤ人たちも、救い主の姿がそのような姿で死んでゆくとは思いもよらなかったことでしょう。中には、不思議な力を持つイエスが支配者であるローマ帝国をやっつけてイスラエル王国を再建してくれると期待したユダヤ人もいたようです。しかしイエスは、テレビのヒーローのようにかっこよく力で敵を倒すのではなく、罵られ鞭打たれて、みじめな姿で十字架に付きました。

クリスマスを祝うというのは、そのようなお方を救い主として受け入れ喜ぶことです。イエス自身の言葉を見てみましょう。「マルコによる福音書」一〇章四二～四五節をお読みします。新約聖書八三頁です。

そこで、イエスは一同を呼び寄せて言われた。「あなたがたも知っているように、異邦人の間では、支配者と見なされている人々が民を支配し、偉い人たちが権力を振るっている。しかし、あなたがたの間では、そうではない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、いちばん上になりたい者は、すべての人の僕（しもべ）になりなさい。人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである。」

「力で民を支配するものが本当に偉いのではない。私は、人々に仕えられるために来たのではなく、僕としてみずから人々に仕えるために来たのである」、そうイエスは語っています。

みなさんは、いかがでしょうか？　絵本の『あんぱんまん』の「あとがき」のように尋ねてみたいと思います。みなさんは、自分の命を捧げるほどに仕える者として来たイエスを、正義の救い主として受け入れることができるでしょうか？　それともやはり、強い力で敵を倒すテレビのヒーローのような正義の味方がいいでしょうか？

救い主が来られたことを祝うクリスマスのこの時期、本当の正義の救い主とはどのような方のことを言うのか、ぜひ一度考えてみて下さい。

手を放したところから

大学宗教主任　田島　卓

創世記　第一三章八～一八節

8アブラムはロトに言った。「わたしたちは親類どうしだ。わたしとあなたの間ではもちろん、お互いの羊飼いの間でも争うのはやめよう。9あなたの前には幾らでも土地があるのだから、ここで別れようではないか。あなたが左に行くなら、わたしは右に行こう。あなたが右に行くなら、わたしは左に行こう。」10ロトが目を上げて眺めると、ヨルダン川流域の低地一帯は、主がソドムとゴモラを滅ぼす前であったので、ツォアルに至るまで、主の園のように、エジプトの国のように、見渡すかぎりよく潤っていた。11ロトはヨルダン川流域の低地一帯を選んで、東へ移って行った。こうして彼らは、左右に別れた。12アブラムはカナン地方に住み、ロトは低地の町々に住んだが、彼はソドムまで天幕を移した。13ソドムの住民は邪悪で、主に対して多くの罪を犯していた。14主は、ロトが別れて行った後、アブラムに言われた。「さあ、目を上げて、あなたがいる場所から東西南北を見渡しなさい。15見えるかぎりの土地をすべて、わたしは永久にあ

なたとあなたの子孫に与える。16あなたの子孫を大地の砂粒のようにする。大地の砂粒が数えきれないように、あなたの子孫も数えきれないであろう。17さあ、この土地を縦横に歩き回るがよい。わたしはそれをあなたに与えるから。」18アブラムは天幕を移し、ヘブロンにあるマムレの樫の木のところに来て住み、そこに主のために祭壇を築いた。

アブラハムは信仰の父と呼ばれます。アブラハムに関する物語を読んでゆけば、信仰の父ということが、完全無欠な過ちのなさを意味するわけではないことがわかるかと思いますが、少なくとも、この箇所を読む限りでは、アブラハムは模範的な信仰を示しているように思われます。

この場所ではまだアブラムと呼ばれているアブラハムは甥のロトたちとの間に生じた争いを調停し、土地を示し、ロトがより好ましい選択ができるように、自由を与えます。いっぽうでロトは、ソドムとゴモラという悪の限りを尽くしている街を知ってか知らずか、少なくとも、豊かな土地である低地一帯を見て、その美しさに目を奪われ、いずれ滅ぼされることになる土地を選択してしまいます。

この物語を見たとき、我々はたとえば「人間万事塞翁が馬」というふうに捉えるのでしょう

か。それとも、欲を出さないことが成功への道だとみるのでしょうか。もちろん、目先の欲求、ここでは豊かな緑の地と、多くの罪を犯しているにも関わらずまだ裁かれておらず、繁栄を謳歌している街に目を奪われた人間に対する、皮肉で教訓に満ちた言葉が語られているのは事実でしょう。しかし、それで全てでしょうか。

もう少し広い目で、このまわりを眺めてみましょう。ウォルター・ブルッゲマンという旧約聖書学者はこの一三章からの物語が、一二章一〇～二〇節とちょうど対照的なペアになっていると指摘します。一二章一〇節からのアブラハムは、エジプトの地で不安に駆られ、妻であるサライを妹だと偽ります。サライはファラオの宮廷に召抱えられます。妻サライの美しさゆえに、自分の身に危険が及ぶことを恐れたアブラハムは、サライを差し出すことによって、我が身の危険を避け、保身に走るのです。もしこれが自己完結する話であったら、まだ納得もできたでしょうが、ここでは、サライという一人の女性が危険にさらされているのです。これは、もはや一人の夫がおこなっていいことの範囲を超えてしまっているでしょう。

幸いに、というべきか、最悪の事態は避けられます。神がファラオの宮廷の人々に恐ろしい病気を与えたために、サライはアブラハムのもとに戻ってくるのです。ただ、アブラハム一人の保身が、妻サライと、逗留の地エジプトの人々をも不幸にしているということに思いを至らせるのであれば、保身に由来する一つの過ちがどれほど多くの人を巻き込んでしまうか、恐ろ

しい気持ちがします。

創世記一二章で、アブラハムが保身に走ったのは、彼が不安を感じたからでした。そしてその不安を自力で、つまり、自分の手の届く範囲で解決しようとしたために、周りの人々を不幸にしてしまったのです。ところが、これとは全く正反対に、一三章でアブラハムが落ち着いていられるのはなぜでしょうか。一三章でのアブラハムが寛大に、甥のロトが豊かな土地を選べるようにできるのはなぜでしょうか。ここでも、ブルッゲマンの見方が参考になります。一三章のアブラハムは、土地が、約束の土地が与えられることに信頼しているのです。神の約束を信頼できているからこそ、何かを失うかもしれないという不安にかられることなく、我が身を守ろうとして小細工を案じたり武器を取ったりすることなく、落ち着いていられるのです。

ここに、信頼ということの一つの奥義が示されているように思われます。人間は生きている限り不安に駆られる生き物であるようです。ある哲学者は、人間の存在の根本的な構造に不安があるのだと語ります。人間は未来のことを考えられる生き物ですが、それは裏返せば、もっとも確実な、やってくることがわかっている自分の未来の最後の端に、死があることを知っているということでもあるからです。そして、この未来は自分ではどうしようもありません。完全に、自分がどうにかできる範囲を超えてしまっています。自分がどうにかできる範囲外のことを、それにもかかわらず自力で解決しようとするとき、人は不安を手放すことができませ

ん。

ところが、自分にとって全く未知のものであるにもかかわらず、そして究極的には全く根拠がないにもかかわらず、約束が与えられることによって、信頼をすることができます。全く根拠がないにもかかわらず、あるいはむしろ根拠がないからこそ、信頼することができるのです。

最近、ある授業のなかで、「問題が隣人愛で本当に解決するとお思いですか?」というコメントをいただきました。私はこれに、なんとも言えない気持ちを抱いたのです。どうやら、この方は、愛が、我々の所有できるもの、我々の所有物であるかのように考えていらっしゃるようでした。というのは、我々が「隣人愛」なるものを持てると考えるからこそ、それで不仲な隣人とも仲良くできるのだと考えているようでした。確かに、自助努力で他人を愛することができれば、素晴らしいかもしれません。しかし、そこでは神はもはや必要ありません。

しかし、愛とは、むしろ、我々の「あいだ」にあるものであって、私が所有できるものではないのではないでしょうか。そうであるなら、愛は、私とあなたの「あいだ」にあって、私のものでもあなたのものでもない、我々の交わりを支える場所のようなものです。自分の手の内にはないし、他人の手の内にもないけれど、ふたりの人間が出会うその場所で、ふたりの人間が出会うことを可能にしている何かこそが、我々が愛や信頼と呼ぶものではないでしょうか。

ところで、もし愛が我々の交わりを支える磁場であるなら、我々はただその磁力に気づくだけで、安心を得ることができるはずです。その磁場は我々の手の届く範囲にはないかもしれませんし、所有できるようなものでもないかもしれません。しかし、我々の手の内にはないからこそ、我々はそれが奪われることを心配したりしなくてもよいのです。奪われるまでもなく、常にそこにあるからです。

神様の約束も、そのようなものではないでしょうか。先ほど、約束には究極的には根拠はないと言いました。しかし、我々には、イエス・キリストが示してくださった十字架があるのです。キリストの十字架は死という限界とそれを超えるもののしるしなのです。

〈祈祷〉

御在天の父よ、週の終わりの日に、礼拝を守ることのできる幸いを感謝します。あなたの愛と約束を忘れ、それゆえにこそ迷う我々に、あなたの愛と約束を思い起こさせてください。あなたの約束に支えられた勇気によって、我々が隣人との関わりに入ることができるようにさせてください。

週日の疲れを癒す休息と、聖日を守る備えを与えてください。この場にいるお一人お一人にあなたの恵みが豊かに臨みますように。またこの場に集い得なかったお一人お一人

に、我々と変わらぬ恵みが与えられますように。

尊き主、キリスト・イエスの御名によって祈ります。アーメン。

光の子として賢く生きよう

大学宗教主任　原田浩司

エフェソの信徒への手紙　五章六～二〇節

6むなしい言葉に惑わされてはなりません。これらの行いのゆえに、神の怒りは不従順な者たちに下るのです。7だから、彼らの仲間に引き入れられないようにしなさい。8あなたがたは、以前には暗闇でしたが、今は主に結ばれて、光となっています。光の子として歩みなさい。9光から、あらゆる善意と正義と真実とが生じるのです。10何が主に喜ばれるかを吟味しなさい。11実を結ばない暗闇の業に加わらないで、むしろ、それを明るみに出しなさい。12彼らがひそかに行っているのは、口にするのも恥ずかしいことなのです。13しかし、すべてのものは光にさらされて、明らかにされます。14明らかにされるものはみな、光となるのです。それで、こう言われています。「眠りについている者、起きよ。死者の中から立ち上がれ。そうすれば、キリストはあなたを照らされる。」

15愚かな者としてではなく、賢い者として、細かく気を配って歩みなさい。16時をよ

く用いなさい。今は悪い時代なのです。17だから、無分別な者とならず、主の御心が何であるかを悟りなさい。18酒に酔いしれてはなりません。それは身を持ち崩すもとです。むしろ、霊に満たされ、19詩編と賛歌と霊的な歌によって語り合い、主に向かって心からほめ歌いなさい。20そして、いつも、あらゆることについて、わたしたちの主イエス・キリストの名により、父である神に感謝しなさい。

今お読みしたエフェソの信徒への手紙五章六節に「虚しい言葉に惑わされてはなりません」とあります。新年を迎えた最初の礼拝で、聖書の言葉にこうしてご一緒に耳を傾ける私たちに聖書は語りかけています。「虚しい言葉に惑わされてはなりません」。感じ方は人それぞれですが、よく考えてみますと、現代社会は「言葉」に重さが感じられない時代とでも言いますか、言葉の軽薄さ、軽さが目立つ時代かもしれません。責任ある政治家や官僚の答弁を聞いてもどこか真実味に欠けていて、取ってつけたような答弁が繰り返されたりしますし、口にした言葉をすぐに訂正し、謝罪したりすることもしばしば見受けられます。ネット社会では無責任に、軽々しく人の人格を攻撃する言葉が拡散され、昔はなかった「ネットいじめ」の問題が子どもたちの間で深刻な問題を引き起こしています。それに「フェイクニュース」と呼ばれる偽の情報が、あたかも真実身を帯びて拡散します。情報化社会の中で、言葉による情報が溢れ、何が

正しく、何が本当なのか、惑わされることも起こります。言葉巧みな特殊詐欺が、高齢者をだます事件は後を絶ちません。パウロが言うまさに「むなしい言葉」が現代の社会には溢れています。

こうして今、私たちが聞く聖書の言葉、エフェソの信徒への手紙の後半部分は、人間としての私たちの生き方をパウロが問い質している箇所です。これまでの古い生き方から、新しい生き方への転換の勧めが語られています。古い年が過ぎ、新しい年を迎えたこのタイミングでご一緒に耳を傾けるのは丁度良いと思います。そして、その生き方の転換を問う時に、パウロが注目するのは、私たちが語り、聴くべき言葉です。パウロは言葉を問うのです。

聖書では五章六節の丁度真上の段に位置する、四章二九節にこういう言葉があります。「悪い言葉を一切口にしてはなりません。ただ、聞く人に恵みが与えられるように、その人を造り上げるのに役立つ言葉を、必要に応じて語りなさい」とあります。ここにあるように「その人を造り上げるのに役立つ言葉」です。

東北学院は「建学の精神」を次のように定めています。「宗教改革の「福音主義キリスト教」の信仰に基づく「個人の尊厳の重視と人格の完成」の教育」。この精神の下で、東北学院は青少年の教育を行ってきました。私もその一端を担っているわけですが、非常にハードルの高い「建学の精神」かもしれません。なぜなら「個人の尊厳の重視」するというのはよく分かるわ

けですが、「個人の人格の完成の教育」という言葉が「学生たちの人格を完成させる教育」という意味では不可能なことに思われるからです。なぜなら、ここにお集まりの方の中には、学生たちよりも多少年配の方もおられます。ご自身で、自分の人格は「完成」していると思われるでしょうか。完成ですよ。「完成」を英語に置き換えると「complete（コンプリート）」ですが、他にも「perfection（パーフェクション）」があります。自分の人格はもう「パーフェクトの状態」だと、社会人になる前の十代、二十代の青年たちが言うのはとても奇妙に思われます。長い人生をかけて、時に社会にもまれ、時には痛みも味わい、また時には心を震わせて感動し、そうした経験も幾重にも積み重ねながら、「わたし」というそれぞれの人格が次第に仕上がっていくものだろうと思います。いや、そもそも人生では完成しないのかもしれません。最後に完成させてくださるのは、私たちが人生を終えた後、神様がわたしたちの人生を完成させ、人格を完成させてくださることでしょう。

ですので、建学の精神を、私はこう解釈したいと思います。それは、礼拝を通して「その人を造り上げるのに役立つ言葉」を語り続けること。それが本学を卒業しても、その後も続く、人格の完成に益することである、と。その人を造り上げる本当の言葉を語り続け、聞き続ける。礼拝の中で交わされる聖書の言葉、イエス・キリストの言葉が、また使徒たちや預言者たちの言葉が、間違いなく人を造り上げていきます。そうして、言葉が、一人ひとりに、まさに

「受肉」することで、人は新しく歩み始め、霊的に成長することができます。

さて、本日の礼拝の聖書の箇所は十二月の上旬には、事前のお知らせやご案内のポスターを作成する必要上、早くから決めておくよう依頼されていました。その時点で私の頭には、これから迎えるクリスマスのことがありました。そこで脳裏に浮かんだのがヨハネによる福音書の第一章です。「一章一節 はじめに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。一章四節 言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。一章一四節 言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た」。クリスマスの出来事を詩人のような印象深い言葉で表現したヨハネ。神の言である、イエス・キリストは、私たちの世界を照らす光として、この世界に受肉し、神でありながら、同時に人間の肉体をまとって、お生まれになりました。私たちはそのことを僅か数週間前に記念し、祝ったばかりです。

しかし、時の流れは残酷で、年末・年始の空気感の中を過ごす内に、クリスマスの喜びも、時間の経過と共に、過去へと押し流されて行ってしまいました。しかし、それは私たちにとってのクリスマスが、ふわふわとした軽いものとなっているからかもしれません。ズシリと岩のように重たいクリスマスであるなら、川の流れも時間の流れにも流されていきません。今一度、キリストの言葉を、キリストの光を、私たちは、私たち自身の体に受肉する必要がありま

す。そこに私たちの新しい一年の新しい生き方があります。キリストの光のある内に、光の子として、光の中を歩みなさいと、パウロは私たちに勧めます。一五節には、光の子として歩む、その歩みについてこう言い換えています。「愚かな者としてではなく、賢い者として、細かく気を配って歩みなさい」。東北学院は、この「賢い者」を育てる大学でありたいと思います。その賢さは、世俗的な意味での偏差値の高い、できる子の賢さではなく、キリストの光を、自らに照らして歩むことができる賢さを具え、神の前に遜ることのできる賢さです。私たちもまたそのような賢さを具えた一人ひとりでありたいと思います。今年の一年が、キリストの光に照らされ、また導かれて、光の子として歩む新しい一年となりますように。主はあなたと共にいます（インマヌエル）。

神に任せる

大学宗教主任　吉田　新

ペトロの手紙一　五章五～七節

5同じように、若い人たち、長老に従いなさい。皆互いに謙遜を身に着けなさい。なぜなら、／「神は、高慢な者を敵とし、／謙遜な者には恵みをお与えになる」からです。6だから、神の力強い御手の下で自分を低くしなさい。そうすれば、かの時には高めていただけます。7思い煩いは、何もかも神にお任せしなさい。神が、あなたがたのことを心にかけていてくださるからです。

いま、お読みしたペトロの手紙は主に、キリスト教に入信して間もない人々に向けて、どのように生きるべきかを教える内容になっています。この手紙を読んでみますと、「なにになにしなさい」といったような命令形が多く、読んでいてあまり心地のよい言葉ばかりではありません。しかし、その中にはとても励ましに満ちたものもあり、私たちの生き方を顧みさせる言葉が多くあります。

特に注目したい言葉は、「思い煩いは、何もかも神にお任せしなさい」という部分です。私たちが用いている新共同訳聖書は、この言葉を少し意訳して訳しておりますが、この箇所をギリシア語から直訳しますと次のようになります。「あなたがたの思い煩いのすべてを神に投げなさい。」新共同訳のように「任せる」と訳しますと、少し分かりにくくなってしまうのですが、この言葉のもともとの意味は、「自分の思い煩い、悩みなどを全部、神に放り投げろ」です。この後、「神が、あなたがたのことを心にかけていてくださるからです」とありますように、神はそれをしっかりと受けとめて下さるという文が続きます。この言葉はとても慰めに満ちたものだと私は考えます。今日は、私たちの身近な体験からこのことについてお話したいと思います。

皆さんのなかには、いま一人暮らしをしている人は多くいると思います。一人暮らしの良いところは、まず、自由であることでしょう。実家に住んでいますと家族の誰かと関わらなくてはなりませんが、一人ですと自分で好きなように生活できます。煩わしくありません。しかし、一人暮らしで良くない点は、悩んだり、落ち込んだりしたとき、気持ちの沈みが激しいことだと思います。誰かが近くにいれば、落ち込んだときに気が紛れます。しかし、一人ですとずっと悩みにとらわれてしまう。悩んでいるとき、夜、一人でいると本当に気分が落ち込みます。なかなか眠れません。朝まで起きています。少し恐ろしい話ですが、自殺する人の多くが

深夜から朝にかけて自殺をすると言われています。深夜一二時から朝の五時頃までが自殺のピークです。日が落ち、周囲が暗くなり、一人でいると悩みがさらに深まるのでしょうか。

私たちの悩みは多くあります。学校、バイト先、職場、サークルなどの人間関係の悩み、自分の見た目や能力に関する悩み、家族に関する悩み、仕事上の失敗、失恋、試験や就職活動の失敗、試合の敗北、さらに、愛する人との永遠の別れなど、悩みには深さと広がりがあります。

このような悩みには、二種類あると私は思います。それは、「どうにかなる悩み」と「どうにもならない悩み」です。自分の力で克服できる悩みでしたら、あなたが働きかけ、努力するしかありません。例えば、バイト先で人間関係がこじれた場合は、上司に問題を報告するとか、職場でハラスメントを受けたならば、然るべき人に訴える。その仕事を辞めるという解決策があります。

しかし、自分の力ではどうにもできない悩みがあります。例えば、好きな人に振られたら、自分の思いは一生懸命に伝えられたとしても、相手の気持ちを無理やりに変えることはできないでしょう。相手が自分に対して好意を持っていないのならば、それまでなのです。さらに深刻な悩みもあります。例えば、愛する人を永遠に失ってしまった場合、とても悲しいことに、もうその人と話をしたり、会うことはできません。自分ではどうしようもならないのです。

どうにもならない悩みと分かっていながらも、私たちは悩んでしまいます。そのことをばかり考えてしまう。しかし、このような状態を冷静になって眺めると、悩みが私たちを捉えているのではなく、実は私たちが悩みを捉え続けているのではないでしょうか。別な言い方をすれば、私たちが悩みごとを意識し続けているのではないでしょうか。悩みや思い煩いを意識すればするほど、それは深まります。

ここで、もう一度、今日の聖書箇所に戻りたいと思います。先の言葉は私たちにとても大切な教えを伝えていると思います。どうにもならない悩み、思い煩いは、自分の手から神の手に放り投げてしまいなさいという教えは、実は悩みや思い煩いが私たちを捉えているのではなく、私たちが悩みや思い煩いにとらわれ過ぎていることを気づかせてくれます。自分の力でどうしようならない事柄こそ、私たちの力を超えた存在にすべてお任せするしかないのです。いや、むしろ、積極的に任せなさいとこの聖書の言葉は命じているのです。この命令は私たちを縛るものではなく、むしろ、解放します。この言葉を聞くか聞かないかで、私たちの日常の生き方が少し変わっていくのではないかと思えてなりません。

思い煩いは、何もかも神にお任せしなさい。神が、あなたがたのことを心にかけていてくださるからです。

キリスト教と占星術

総合人文学科長　川島堅二

マタイによる福音書　二章一～一二節

1イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになった。そのとき、占星術の学者たちが東の方からエルサレムに来て、2言った。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」3これを聞いて、ヘロデ王は不安を抱いた。エルサレムの人々も皆、同様であった。4王は民の祭司長たちや律法学者たちを皆集めて、メシアはどこに生まれることになっているのかと問いただした。5彼らは言った。「ユダヤのベツレヘムです。預言者がこう書いています。6『ユダの地、ベツレヘムよ、／お前はユダの指導者たちの中で／決していちばん小さいものではない。お前から指導者が現れ、／わたしの民イスラエルの牧者となるからである。』」7そこで、ヘロデは占星術の学者たちをひそかに呼び寄せ、星の現れた時期を確かめた。8そして、「行って、その子のことを詳しく調べ、見つかったら知らせてくれ。わたしも行って拝もう」と言ってベツ

レヘムへ送り出した。9彼らが王の言葉を聞いて出かけると、東方で見た星が先立って進み、ついに幼子のいる場所の上に止まった。10学者たちはその星を見て喜びにあふれた。11家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。12ところが、「ヘロデのところへ帰るな」と夢でお告げがあったので、別の道を通って自分たちの国へ帰って行った。

マタイ福音書はユダヤ人に対して書かれた福音書です。福音書をイエス・キリストの系図で始めていること（一章一節以下）。これは家系図を重要視するユダヤ人の感覚に沿うものです。イエスの誕生の際に起きたことを繰り返し旧約聖書の預言の成就として記述していること（一章二二節、二章一五、一七、二三節参照）も同様で、イエス・キリストが旧約聖書で預言されていた救世主であることを当時のユダヤ人に示す有効な記述の仕方でした。

しかし、マタイ福音書は単に当時のユダヤ人の民族感情に寄り添うだけにとどまらず、彼らの民族感情としては到底受け入れがたい事実をエピソードとして差し挟むことにより、狭く排他的になりがちな民族主義を批判し、それを乗り越える試みをしているように思います。

例えば先述したキリストの系図ですが、一章五節に次のような記述があります。

「サルモンはラハブによってボアズを、ボアズはルツによってオベドを」

ここに例外的に二人の女性（配偶者）の名前「ラハブ」「ルツ」が書きとどめられているのですが、ラハブは娼婦、ルツは異邦人です。あえて名をあげることがユダヤ人の価値観からはプラスになるどころか、異邦人の血が混ざっているということは当時のユダヤ人にとっては汚点以外の何ものでもなかった。そういうような系図をあえて記すことで、排他的な民族主義を批判しているのです。

それをさらに露骨に示しているのが、二章一節以下、誕生した救世主キリストを最初に礼拝したのが、異国の占星術の学者たちであったという記述です。ユダヤから見て東方の異国であったバビロニアあるいはペルシャに占星術があったということは旧約聖書の時代からよく知られていたようです。ダニエル書にはそうした占星術が全く無力な気休めに過ぎないことが繰り返し記述されています（二章二七節、四章四節、五章七節参照）。占いや魔術は神の目には悪であるという歴史書の記述もあります（歴代誌下三三章六節）。イエスの時代のユダヤ人たちも同じ考えを共有していました。

したがって、ユダヤ人のもっとも賢いとされる祭司長や律法学者たちが、キリストの生まれ

る町がベツレヘムであることは言い当てられても、その詳細な場所は不明であったのに対し、異国の占星術師たちは彼らの星を占う術に導かれて、キリストのもとにたどり着き最初に礼拝する光栄に与ったという記述は、当時のユダヤ人にとっては到底受け入れがたい事実だったと思います。

今日でも聖書を原理主義的に読むキリスト教の一派（エホバの証人）は、クリスマスは決して喜び祝うような出来事ではないと主張するのですが、その理由の一つが、この占星術の学者たちの登場です。この異教の星占いたちがヘロデ王を刺激してベツレヘム一帯の二歳以下の男の子の虐殺という悲劇を招来した。クリスマスは異教の星占いの関与によって血塗られた悲劇となったと主張します。

商業ベースにただ騒がしいだけのクリスマスを忌避するのならわかりますが、幼児虐殺の原因はあくまでもヘロデ王の権力欲の暴走であり、その責任を占星術の学者たちに帰すことはお門違いでしょう。

私たちはそのような解釈はしません。キリストを最初に礼拝したのが異国・異教の占星術師だったという事態は、イエス・キリストの福音はその当初から民族・国境を越えた普遍性を持ったものであるということを示しています。

とくに覚えたいのは、占星術師たちが彼らの星を占う術を捨てて、聖書の伝統に学び、改宗

してキリストの誕生を知ったということではないということです。彼らは、聖書の伝統とは無縁の占星術に導かれてキリストのもとに導かれたのです。

このことはキリストに近づく道は必ずしもキリスト教的なライフスタイル（日曜日に教会に行くとか毎日祈る、聖書に親しむなど）によるのではないということを示しています。私たちに既に与えられているものを用いて神は私たちをキリストに導かれます。

神学生時代に伝道実習を秋田の八郎潟教会で行いました。そこで信者の方々との交流の中で、「神に仕える」「キリストに従う」とは自分にとってどういうことかという話し合いになった。ある信者さんは「日曜礼拝に休まず通うこと」といい、ある信者さんは「教会学校の教師として奉仕すること」などと語りました。その中に秋田杉の木工職人さんがおられ「おれは水の漏れない桶を作ることだ」と言われたのです。そのことが今も印象に強く残っています。

休まず礼拝に行くこと、教会学校の奉仕等々も立派に神に仕える方法でしょう。しかし、それだけではなく、一見キリスト教のライフスタイルとは無縁に思えること、日々の自分の仕事に誠実に取り組むこと、そのことによっても、否、そのような自分自身の日常生活、生き様を通してこそ、私たちはキリストのもとへ導かれます。キリストのもとへ誰よりも先に導かれた異国の占星術師たちはこのことを私たちに示しています。

死と弱さを神に捧げよう

文学部教授　鐸木道剛

『雅歌』

1-2「どうかあの方が、その口のくちづけをもって、わたしにくちづけしてくださるように（Kiss me, make me drunk with your kisses !）」2-10「恋人よ、美しいひとよ。さあ、立って出ておいで（Rise up, my love, my fair one, and come away）」

これは『雅歌』からの二つの箇所です。丁寧で穏便に訳されていますが、最近の英訳では直裁に「キスして（Kiss me）」です。冒頭が「キスして」で始まる聖書なんて、一体どういうことでしょうか？　聖書にこんな恋愛詩があるとは驚きです。伝統的にこの恋愛詩は、神と教会の間の関係の比喩と解釈されているようです。しかしソロモンは賢い王様として知られ、七百人の王妃と三百人の側室がいて、その女性たちの影響を受けて、彼女たちの様々の出身地の神々つまり偶像を崇拝する過ちに至ったと聖書には書いてありますから（『列王記』一一章）、その女性たちとの経験からの恋愛詩なのかもしれません。もう一つ『雅歌』から二つ目に選ん

だのは、男が女に向かっていう言葉です。これも英訳をみてください。「出ておいで（Come away）」となっています。この「カム・アウェイ」のニュアンス、つまり「カム（come）」は、こちらに来ること、しかし「アウェイ（away）」とはあちらにというニュアンスで矛盾しています。このニュアンスがわからなくて、泉の教養教育の教員控え室で英語ネイティヴの先生に、この文章どういう意味なのですかと質問してみたことがありました。そしたら「一緒にどこかに行こう」というニュアンスですと教えられて、なるほどと合点しました。そのすぐ後に春の様子が記されていますので、花園に出かけてデートしましょうという意味です。

このような恋愛詩がどうして旧約聖書の正典にあるのでしょうか？確かに神と人間との愛の関係であるとの解釈が一般的なのでしょう。しかし僕はここで、「雅歌」はペシミズムで有名な『コヘレトの言葉』のすぐ後に続いていることで理解できると思いました。『コヘレトの言葉』は「空しい、空しい。全ては空しい」（一章一節）に始まります。しかし最後の方でその空しい人生を丸ごと肯定します。「さあ、喜んであなたのパンを食べ、気持ちよくあなたの酒を飲むがよい。・・太陽の下、与えられた空しい人生の日々、愛する妻と共に楽しく生きるがよい」（九章七～九節）。

そして『詩編』の一四八編では、全ての被造物に対して創造主なる神を讃えよと歌います。「天において主を賛美せよ。日よ月よ、主を賛美せよ。輝く星よ、主を賛美せよ。・・地におい

て主を賛美せよ。海に住む竜よ、深淵よ、主を賛美せよ。・・・山々よ、すべての丘よ、・・・野の獣よ、すべての家畜よ、・・・君主よ、地上の支配者よ、若者よ、おとめよ、老人よ、幼子よ。主の御名を賛美せよ」（『詩編』一四八編一節～一三節）。

これはどういうことでしょうか？　すべてが死すべき被造物であり、我々人間についても神は「塵にすぎないお前は塵に返る」（『創世記』三章一九節）と言われるのに、そんなに楽観的で良いのでしょうか？　僕はこれを「やけっぱち」と解釈しています。つまり、人生は空しい、それはどうにもできない現実である、なら『コヘレトの言葉』にあるように、せいぜい楽しもう。これは皆さんもよく理解できると思います。世界最古の文学と言われる紀元前十三世紀の『ギルガメシュ叙事詩』にも同じことが書いてあります。エンキドゥを失って不死を求めるギルガメシュに女主人はこう言います。「ギルガメシュよ、あなたはあなたの腹を満たしなさい。昼も夜もあなたは楽しむがよい・・・あなたの衣服をきれいになさい・・・あなたの手につかまる子供たちをかわいがり、あなたの胸に抱かれた妻を喜ばせなさい。それが〔人間の〕なすべきことだからです。」人はいずれ死ぬ。それは仕方ない。それならせいぜい楽しもう。「世界は空しい、しかし君と僕の愛は永遠だ。」学生さんたちと話をしていて、そういう理解で日々過ごしている人が多いように思えます。

イエスさまはどうおっしゃったでしょうか？　「実に神の国はあなたがたの間にあるのだ」

（『ルカによる福音書』一七章二〇～二一節）また「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである」（『マタイによる福音書』一八章二〇節）とおっしゃっています。またヨハネは次のように記します。「言葉は肉となって、わたしたちの間に宿られた」（『ヨハネによる福音書』一章一四節）。神の国はすでに来ているのです。聖フランチェスコに『詩編』一四八編とよく似た内容の歌があります。『太陽兄弟の賛歌（Canticum fratris solis）』です。太陽に兄弟、月に姉妹と語りかけ、やはり創造主を賛美せよと歌う歌です。こう始まります。「ほめられよ、わが主よ、おんみの全被造物によって、特に兄弟なる太陽によって。姉妹なる月と星によって、兄弟なる風によって、空気と雲と晴れとすべての天候。水。火。われらの姉妹なる母、大地によって。この姉妹は我らを支え、我らを治め、さまざまな果をさまざまの色の花と草とともに生みいだす。」まずは、『詩編』一四八編のように被造物を列挙するところだけだったらしいですが、最後に臨終にあたって次のように付け加えたと言います。「ほめられよ、わが主よ。わたしたちの姉妹である死ゆえに（propter sororem nostram Mortem）、生あるものはだれもそれを逃れられない。―おんみのいと高いみ旨を見出す者は幸いである」（以上、永野藤夫訳、平凡社、一九九七年。一部改変あり）。つまり人間の現実生活において最も悲惨である死、それによってもまた神を賛美しようというのです。かつて一九九七年にイギリスのダイアナ妃が不慮の事故によって亡くなられたとき、

ウェストミンスター修道院での彼女のお葬式で、チャプレンが勧告の中で、こう述べられました。「我々の死と弱さを神に捧げよう（Let us offer to him and for his service our own mortality and vulnerability）」。死もまた神様の栄光を現すことができる。これが福音（よき知らせ）です。「死」「弱さ」、いずれも人間的には否定的なものです。現実世界において我々は日頃、永世を望んで、強さを競っているのですから。しかしイエスは、それを逆転させます。弱いものが強くなり、後のものが先になり、低いものが高くされます。逆転されて、そういう人間的な価値基準自体が否定されるのです。そしてパウロが言うように、「被造物は虚無に服している。・・・被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっている」（『ローマの信徒への手紙』八章二〇～二七節）。しかし「万事が益となるように、ともに働く」（同、二八節）。この楽観主義が常に前向きである近代を作ったのです。もちろんその背景には旧約の原罪があることを忘れてはなりません。トレルチが「プロテスタンティズムにおける現世肯定（Weltbejahung）というものはつねにもっとも峻厳なる罪観念と確信不動の来世観とに深くも根ざしている」（『ルネサンスと宗教改革』内田芳明訳、岩波文庫、四〇頁）という通りです。このことを思うと、我々が学院の中で毎日十五分行っている大学礼拝が、厳かに始まり（旧約）、華やかに終わる（新約）ことの意味も明らかでしょう。学問だけでなく現実生活そのものが礼拝によって支えられているのです。

あちら側からの視線

経営学部教授　松村尚彦

コヘレトの言葉　一二章一節

「青春の日々にこそ、お前の創造主を心に留めよ。苦しみの日々が来ないうちに。『年を重ねることに喜びはない』と／言う年齢にならないうちに。」

大学時代の私は、テニスのサークルに入ったり、ゼミの勉強に一生懸命取り組んだりして、今から思うと充実した大学生活を送っていたと思います。しかしあのころの自分の心の中を振り返ってみると、自由だ、楽しいという気持ちもありましたが、「何かが足りない」「だけど、それが何だか分からない」というような、正体の分からない不安を前にして、いらだちを感じることがあったことを思い出します。

私の時とは時代が大分違いますが、それでも学生のみなさんの話を聞いていると、今でも「なんだか正体の分からない不安」に悩まされている、あるいは「自分は幸せなはずなんだが、何だか物足りなさを感じてどうにもならない」と思っている学生が少なからずいるようだ

と感じることがあります。

例えば、何年か前にある学生が、「旧約聖書のコヘレトの言葉は深いですね～」と言ってきたことがありました。先ほどコヘレトの言葉の一部をお読みしましたが、その全体のテーマは、人生の空しさということです。

そこでは例えば、人生に成功して金持ちになった人の心の告白が出てきます。また一生懸命勉強して世の中の知識を極めつくした人の心の告白が出てきます。さらに快楽を追求して欲しいものを全て手に入れた人の心の告白が出てくるのですが、どの人も一時的に良い思いをすることはあっても、それが長続きはしなかったという告白をしているのです。こうした人の告白を通じて、コヘレトは人生の空しさ、つまりこの世には、人の心を満たし続けてくれるものは何一つない、ということを解き明かします。

言い換えると、そうした人生のむなしさ、あるいは先ほどの言葉でいえば、「なんだか正体の分からない不安」は、どんな人であっても逃れることのできない悩みであり、自分の力だけではどうすることもできない人生の暗さだというのです。

実はこのことに関連して、以前ある人からとっても面白い話を聞きました。その話を聞いた時には、何か久しぶりに自分の心の中に光がさしてきたような、そのようなとても印象深い話だったので、皆さんにも紹介したいと思います。

その話をしてくれた人が子供の頃に、親戚のお兄さんが冬山で遭難にあったのだそうです。冬山では雪崩に会ったときには、その場から動いてはいけないというのが鉄則です。動くことが、また雪崩を誘発して二次被害が起きるといけないからです。

もちろん、そのお兄さんもそのことは良く分かっていたのですが、いざ自分が遭難すると、不安に駆られてじっとしてはいられず、ゆるくなった雪の斜面をどこに向かってよいかも分からないまま、あっち、こっちと動いていたそうです。このように人間は、自分の命が危なくなると、自分の力で何とかしようとして、かえって状況を悪くするものなのかもしれません。

しかし、そんな時に遠くから救援のヘリの音が聞こえてきたというのです。そしてこの人は、これで助かったという安堵感から、おもわずヘリの方に向かって歩き出そうとしたそうです。まさにその時です。ヘリからマイクを通じて「動かないでください。」「危険ですから動かないでください。」という警告が聞えました。そしてその直ぐ後にヘリの救助の人がこう言ったというのです。

「こちらからはあなたが見えています。だから必ず救助しますので、安心してください。」と。

「こちらからはあなたが見えています。だから安心してください。」

この言葉を聞いたときに、「う～ん、この感覚どこかで自分も体験したコトがあるぞ！」という既視感というかデジャブーというか、そんな不思議な感じがしてハッとさせられました。

それは私が学生時代に悩んでいた「なんだか正体の分からない不安」、そこから抜け出すきっかけとなった、私にとってはとても大切な「神様との出会い」の経験とそっくりだったのです。神様との出会いとは、何か髭を生やした仙人のような人と出会ったということではありません。そうではなく、あたかも遠くの方から「ここからはあなたが見えています。だから安心しなさい」という声を聞くような経験でした。それは、これまで知らなかった「あちら側からの視線」に気づく経験であり、ずっと視線を私に送り続けてくださっているお方の存在に気づかされる、そんな経験であったのです。

「青春の日々にこそ、お前の創造主に心を留めよ。」

今日の聖書の箇所は、私たちに「人は一人ぼっちではないんだよ」と語りかけています。私たちを造られた方がおられること、そのことに気づき、それに心を留めること、それが人生の

空しさから救い出される唯一の道だ、聖書はそのように述べているのだと思います。

真の希望

法学部教授　横田尚昌

ローマの信徒への手紙　五章一～一一節

1このように、わたしたちは信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストによって神との間に平和を得ており、2このキリストのお陰で、今の恵みに信仰によって導き入れられ、神の栄光にあずかる希望を誇りにしています。3それば かりでなく、苦難をも誇りとします。わたしたちは知っているのです、苦難は忍耐を、4忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。5希望はわたしたちを欺くことがありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。6実にキリストは、わたしたちがまだ弱かったころ、定められた時に、不信心な者のために死んでくださった。7正しい人のために死ぬ者はほとんどいません。善い人のために命を惜しまない者ならいるかもしれません。8しかし、わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました。9それで今や、わたしたちはキリスト

の血によって義とされたのですから、キリストによって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。10敵であったときでさえ、御子の死によって神と和解させていただいたのであれば、和解させていただいた今は、御子の命によって救われるのはなおさらです。11それだけでなく、わたしたちの主イエス・キリストによって、わたしたちは神を誇りとしています。今やこのキリストを通して和解させていただいたからです。

いまお読みした聖書個所で、いちばん心に響くのは、やはり第三節の第二文から第四節にかけての「苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを私たちは知っている」ということでありましょう。

確かに、古来から諺では「艱難汝を玉にす」といわれており、また、「若い時の苦労は金を払ってでもしろ」などと苦難を奨励しているかのような諺すらあります。第三節第一文でも、「苦難をも誇りとします」とあることからして、やはりそうなのかと思ってしまうものです。もちろん、苦難に堪えた先に希望が芽生える、苦難に堪えて来たからこそ、希望に生きることができると、というのは間違ってはいないと思います。しかし、それは苦難を真に乗り越えることが実際に出来た人々が後から言うことでありましょう。

私たちの多くは、苦難に遭遇すると、どうしてもそこから逃れることばかりを考え、問題の

先送りをしがちのように思われます。下手をすると、そこで胆力を使い果たし無気力になってしまい、やがては絶望を抱くことになってしまうかもしれません。だから頑張れ、というのでは荒唐無稽もいいところです。

ここで、注意しなくてはならないことは、苦難、忍耐、練達、希望というところだけを見てはならない点です。その前に、その前提として「神の栄光にあずかる希望を誇りにしている」というくだりがあるのです。苦難が忍耐を、忍耐が練達を、練達が希望を生むという喜ばしい連鎖が成り立つ土台には、この神の栄光を信ずることによりもたらされる希望があることを忘れてはなりません。つまり、聖書は自分で思い描く希望ではなく、「神の栄光にあずかる希望」を抱くようにと教えます。そうした希望を抱けるからこそ、苦難の中でも忍耐ができ、真の希望が見出せるのです。というのは、希望を一人で抱き続けることは、わたしたちにとって至難の業だからです。

それでは、「神の栄光にあずかる希望」とは、どのような希望でしょうか。それは、第一節で「わたしたちは信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストによって神との間に平和を得て」いることによる希望です。なぜ、神との間に平和が得られたのかといえば、第六節において「実にキリストは、わたしたちがまだ弱かったころ、定められた時に、不信心なわたしたちのために死んでくださった」と語られるところに端的にその理由を見

出すことができます。ここに「弱さ」とは、私達が罪の力に翻弄され、神の愛を忘れ、不幸や不条理な出来事に遭遇すると神を憎んでしまう弱さをさします。父なる神は、そのような弱い私たちのために、主イエス・キリストをこの地上へとお遣わしになりました。そして、主イエスは十字架にかかり処刑され葬られ陰府に下り、そこからの復活をもって悪に勝利し、罪の奴隷であった私たちを贖いだしてくださったのです。これにより神は私たちの罪を赦し、罪によって生じていた敵対関係を乗り越えて和解を与え、私たちとの間に平和な良い関係を結んでくださいました。

それまでの私たちは、神様の導きを信ずることができず、不安のあまり神様を侮り、みてくれの成果に嬉々として力でねじ伏せただけの支配力に安住し、あまつさえ神を頼らず神をも乗り越えられると思いあがっていたのです。本来であれば神の怒りをかい排除されて当然でした。そのような弱い私たちに神様は、排除するどころか愛の御手を差し出してくださったのです。そのことへの、かたじけない思いを致すところに「神の栄光にあずかる希望」が見出せます。

神様は、この地上にある私たちを、来る日も来る日も顧み、恵みのうちにおいていてくださいます。ですから、神様を信じて神様の教えに従い、神様の導かれるままに生きて行けば間違いないはずなのです。

それなのに、私達は、今もなお、死に対する恐怖、命に限りがあることにとらわれ、時間がないんだといわんばかりに取り繕いの成果をあげて、快楽・快感を得ようとします。そこでは、首尾よく成果を出した者に対する妬み嫉みといったゆがんだ感情が頭をもたげてきます。

こんなことをしていたのでは、厳しい競争社会の中で競争するといっても、新機軸で勝負するのではなく、足の引っ張り合いや蹴落としによって競争に勝った気になるだけです。そして、嘲りや悪口の連鎖の果てに、いずれは疲労困憊による共倒れしかありません。神のお導きに信頼をおくことができていないのです。

そのようなことをせず、父なる神が弱い私たちに差し出してくださった愛の御手を握るような思いで、主イエス・キリストを神の子と信じ、その御業への感謝の思いを致すところに神様と私たちとの平和が実現します。そして、苦難に遭っても忍耐することができるようになり練達が生まれ真の希望がもたらされるのです。

第一節の「信仰によって義とされたのだから」というのはそういうことです。

そして、そのような信仰によって、罪の力に翻弄されない、正しい生き方、失敗を恐れず、失敗しても、逆にそれを糧にして次に繋げていく生き方ができるのだと思います。

お祈りをいたします――

復活の体

工学部准教授　長島慎二

コリントの信徒への手紙一　一五章三五～四三節

35しかし、死者はどんなふうに復活するのか、どんな体で来るのか、と聞く者がいるかもしれません。36愚かな人だ。あなたが蒔くものは、死ななければ命を得ないではありませんか。37あなたが蒔くものは、後でできる体ではなく、麦であれ他の穀物であれ、ただの種粒です。38神は、御心のままに、それに体を与え、一つ一つの種にそれぞれ体をお与えになります。39どの肉も同じ肉だというわけではなく、人間の肉、獣の肉、鳥の肉、魚の肉と、それぞれ違います。40また、天上の体と地上の体があります。しかし、天上の体の輝きと地上の体の輝きとは異なっています。41太陽の輝き、月の輝き、星の輝きがあって、それぞれ違いますし、星と星との間の輝きにも違いがあります。42死者の復活もこれと同じです。蒔かれるときは朽ちるものでも、朽ちないものに復活し、43蒔かれるときは卑しいものでも、輝かしいものに復活し、蒔かれるときには弱いものでも、力強いものに復活するのです。

本日与えられたみ言葉はコリントの信徒への手紙一の一五章三五節から四三節までです。「死者はどんなふうに復活するのか、どんな体で来るのか、と聞く者がいるかもしれません。」と、パウロがあえて質問を設定して死者の復活の本質を明らかにしている箇所です。この箇所は信者に対して語られたものですが、信者であっても、死者の復活ということを信じ、受け入れていくことが困難であったことを物語っています。そして、パウロの論述は、コリントの信徒ばかりではなく、二千年を経た現代のキリスト者ひとりひとりにとっても信仰の道しるべになっています。まさしく、聖書のみ言葉は、現代にいたるまで、そして、永遠に生きて続くものなのです。

さて、みなさんは神様を思い浮かべるとき、どのような姿を思い浮かべるでしょうか。輝く白い衣を着た老人でしょうか。もとより、神様は、見ることのできない存在なのですが、少なくとも、心に思い描く神様は襤褸を纏った姿ではないでしょう。まして、死刑台の上で苦しんでいる死刑囚の姿ではないことでしょう。ところが、キリスト者が神とあがめるイエスは、十字架の上でわき腹を槍で突かれて血を流したのです。死刑台に架かって死んだイエスをキリスト者は神とあがめるのです。それは、キリストが復活をし、天に上げられたからです。復活は単に死者が蘇生したということではありません。キリストが復活をしたから教会ができまし

た。その理解は聖書に記される初代の教会も、二千年を経た現代の教会も同じです。キリストが復活をしなかったのなら、わたしたちキリスト者の信仰は空しく、教会の存在も空しいのです。ですから、キリスト者にとって、キリストの復活は大前提であって、それを否定する者はいないのです。ところが、キリストが復活したことは受け入れても、そのことが、自分が死んだあと終わりの日に復活すること、また、先に亡くなった家族と再会することとが結びついてこないとしたら、わたしたちの信仰は、やはり、なんと空しいことでしょう。本日読みました聖書箇所の少し前の一二節以降に「キリストは死者の中から復活した、と宣べ伝えられているのに、あなたがたの中のある者が、死者の復活などない、と言っているのはどういうわけですか。死者の復活がなければ、キリストも復活しなかったはずです。」とパウロが指摘している通りです。コリントの信徒のうちの一部は、死者の復活を信じることができなかったのです。そこで、パウロは「死者はどんなふうに復活するのか、どんな体で来るのか、と聞く者がいるかもしれません。」との設問をたてたのです。

実は、わたし自身、この設問を真剣に問われたことがあります。今は二十九歳になる息子がまだ一歳四か月であったとき、双子の弟が亡くなりました。しばらくして、家内が真剣にわたしに聞いたのです。復活するとき、どのような姿になるのかということをです。すなわち亡くした息子と再び出会うとき、どのような姿になっているのかということです。わたしも、ずっ

と考えていました。そこで、すぐに、本日読みました聖書の箇所を示しました。「蒔かれるときは朽ちるものでも、朽ちないものに復活し、蒔かれるときは卑しいものでも、輝かしいものに復活し、蒔かれるときには弱いものでも、力強いものに復活するのです。」とあることをです。復活の体がどのようなものであるかはわたしにはわかりません。ただキリストの復活を通して、希望を抱いているのです。

はたして、キリスト教の信仰を持ったからと言って、死ななくなるわけではありません。病気もするし、この世の命が終わるときがやってくるのです。しかし、この世の死が死で終わるだけであるならば、三三節に、「死者が復活しないとしたら、『食べたり飲んだりしようではないか。どうせ明日は死ぬ身ではないか』ということになります。」とある通りになるでしょう。それは、実に空しいことなのです。ですから、キリスト者にとって、復活後の世界は希望なのです。しかし、その体は具体的にはわからないのです。ただ、神に信頼して待ち望むのです。そこまで考えて、わたしは、ふと、わたしの希望を神様に願ってもいいのではないかと考えたのです。

それは、インターネットの無い世界です。洋食と言えばコロッケのことで、とんかつなど話に聞くだけの世界です。天気がよければ、夕方まで、グラウンドで遊び、雨の日は寝転がって好きな絵を描いていられる世界です。暑い日はスイカを井戸で冷やして、窓を開け放って蚊帳

に潜り込む世界です。寒い日は、こたつに首まで入っていられる世界です。胡麻和えをつくる日は、頑張ってごますりをする世界です。昼間は、鍋を持って、向かいの豆腐屋で豆腐を買って、和からしをのせてもらう世界です。時々は祖母にヘルスセンターに連れていってもらって、従妹と不思議の家で遊ぶことができる世界です。寿司というのは、土産の巻きずしのことで握りずしなどは食べたことがない世界です。毎日、八百屋が御用聞きに来る世界です。数件隣にテーラーと酒屋と煎餅屋があって、魚屋、肉屋、八百屋、お菓子屋がある世界です。死などということは頭の片隅にも無かった世界です。家族がいて、友達がいる世界です。すなわち、自分の子供の頃の世界なのです。

そういえば、イエス様は、天国に入るのには子供のようにならなければならないとおっしゃいました。その箇所については、子どもの特徴について説教がなされますが、わたしには、まさしく、み言葉通り、復活の世界は子どもの世界なのではないかと感じるのです。

いずれ、これは信仰の話です。信仰は、頭で考えて、自分で持つことにするものではありません。わたしが強制してみなさんに持たせることのできるものでもありません。その先にあるのは偶像の神になるでしょう。ですから、わたしは、求道をしたときに祈りました。「神様、あなたがいらっしゃるなら信仰を与えてください。」と。ただ、わたしができるのは、祈ることだけなのです。

人生を変える秘訣

教養学部准教授　大澤史伸

フィリピの信徒への手紙　四章六節

「どんなことでも、思い煩うのはやめなさい。何事につけ、感謝を込めて祈りと願いをささげ、求めているものを神に打ち明けなさい。」

みなさん、こんにちは。私は教養学部地域構想学科の教員の大澤史伸といいます。大学では、「社会福祉概論」や「福祉サービス論」などを教えています。どうぞよろしくお願いいたします。最近、感動した動画がありました。みなさんは、その動画を見たでしょうか？　それは、近畿大学の卒業式の動画です。見た人は手を挙げてみてください。今年の近畿大学の卒業式のゲストスピーカーは、西野亮廣でした。私は、お笑いが好きで、定期的にお笑いのライブに行っているので、漫才コンビ　キングコングのツッコミ担当の西野と言った方が、馴染みがあります。

でも、現在の彼の肩書は、お笑いタレント、そして、絵本作家でもあります。その他にも俳

優、脚本家、といろいろな顔を持っています。そして、彼がスピーチをした近畿大学の卒業式の動画は、わずか6日で再生回数一五〇万回を突破しました。内容については、ぜひ自分の目で見てほしいと思います。

私の知っている西野亮廣は、好感度低い芸人とか、いじられキャラ、炎上芸人とか言われていましたが、彼は、周りの評価など気にしないで、それを楽しむかのように、自分のできること、したいことを一生懸命にやっている人だと今回、知ることができました。今後の彼の活躍がとても楽しみです。

さて、今日の聖書の言葉もある意味で人生最悪の状況から大逆転の人生を歩んだある男の話です。ここには、大逆転の人生を歩むための方法が書かれています。共に聖書を学んでいきましょう。

①「思い煩わない」こと

大逆転の人生を歩むための第一の方法は、「思い煩わない」ことです。聖書を読みます。「どんなことでも思い煩うのはやめなさい。」とあります。この手紙を書いた男の名前は、パウロと言います。パウロは、この手紙をどこで書いたと思いますか？　みなさんは、おそらくというか、絶対に行ったことがない場所だと思います。どこでしょうか？　実は、パウロという人物はこの手紙を刑務所の中で書いています。

刑務所の中ですから、いつ釈放されるか分かりませんし、場合によっては死刑になることもあります。まさに、人生最悪の状況であり、絶体絶命の状況であります。しかし、パウロはそのような中で言うのです。「どんなことでも思い煩うのはやめなさい。」と。例えば、思い煩うことは、心や体のエネルギーを消耗し、病気になりやすくなることが、医学的にも証明されています。

さらに言うならば、思い煩うことによっては、何も生まれず、自分の人生をよりよく生きる上での大きなデメリットになるのかも知れません。いずれにしても、私たちは自分の人生をよりよく生きるためには、どんなことでも思い煩うことをやめなくてはならないのです。どんな状況でも思い煩わないときに次のチャンスがやってくることを知らなくてはなりません。

②感謝をすること

次にパウロは、「何事につけ、感謝を込めて祈りと願いをささげ、」と書いています。自分の人生を変えるための2つ目の方法は、感謝をすることです。パウロは「思い煩わない」つまり、どんな状況でもクヨクヨしないばかりか、その状況を感謝をもって受け入れることを私たちに提案しているのです。

私もそうですが、多くの人々の中にはどんな状況でもクヨクヨしないで元気でいることはできるかも知れませんが、それでは、その状況を感謝できるかというと、そういう人はそう多く

はいないことが分かります。でも、パウロはその状況を感謝するといっているのです。なぜでしょうか？　クヨクヨしないばかりか、その状況を感謝をもって受け入れる時に本当の意味でその最悪な状況を克服することができるということをパウロは私たちに教えているのではないでしょうか？

私の大好きな先生でアメリカのマーリン・キャロザースという人がいますが、彼は「賛美の力」という本を書いています。賛美、つまり感謝をすることはとても大きな力となるということを言っています。

③願い続けること

3つ目にパウロは、こう言います。「求めているものを神に打ち明けなさい。」と。繰り返しになりますが、パウロはこの時、刑務所の中にいるのです。人生最悪、絶体絶命の中で彼は願いを持つのです、そして、願い続けるのです。みなさんは、自分の求めているものを神に打ち明けているでしょうか？　もっというならば、神様と約束をしているでしょうか？

パウロが刑務所の中で神に何を求め、打ち明けたのかは彼の人生を見ると良く分かります。パウロは自分の生涯を通してキリスト教を伝えています。彼は何度も捉えられ、刑務所に入れられています。それでも、彼はキリスト教を伝えることを辞めようとはしませんでした。みなさんが学んだ中学や高校の社会科の教科書の中には書いてあったと思います。パウロはキリス

ト教の伝道者あるいは、キリスト教を作った人、と。いずれにしてもパウロがいなければキリスト教はなかったといえます。そして、キリスト教がなかったら、東北学院もなかった訳ですから、みなさんの人生もあるいはかなり違ったものとなったのかも知れません。パウロは、人生で最悪の状況の時にも自分の求めているものを願い続けることによってその後の人生を大きく変えることができたのです。

最後にこんな話をして終わりたいと思います。かなり昔のことですが、靴を売っている二人のセールスマンがいました。その二人のセールスマンはアフリカに行って、靴を売るように会社から命令を受けます。一人のセールスマンは、アフリカに行ってびっくりしました。誰も靴を履かないでみんな裸足で歩いていたからです。そのセールスマンは会社に報告しました。「社長、無理です。誰も靴を履いている人がいないから、靴なんか売れません。」そして、そのセールスマンは会社に戻ってしまいました。

もう一人のセールスマンは誰も靴を履いていないアフリカの人々を見て、会社に電話します。「社長、感謝です。もう最高です。アフリカの人は誰も靴を履いていません。どんどん靴を送って下さい。みんなに靴を売ります。社長、ありがとうございました。」

現在のアフリカの人々はみんな靴を履いていることからも分かるように、このセールスマン

は成功をしたのです。自分の人生を変え、逆転の人生を歩むためには、①思い煩わないこと、②感謝をすること、③願い続けること、です。

東北学院の最初のクリスマス

東北学院史資料センター　日野　哲

フィリピの信徒への手紙　第二章六～一一節

6キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、7かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、8へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。9このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。10こうして、天上のもの、地上のもの、地下のものがすべて、イエスの御名にひざまずき、11すべての舌が、「イエス・キリストは主である」と公に宣べて、父である神をたたえるのです。

私が勤務する東北学院史資料センターには、第二代院長シュネーダー先生の説教原稿が多数保存されていますが、その中に「東北学院の最初のクリスマス」というタイトルの説教があります。東北学院が学校全体として初めてクリスマスを祝った一九一六（大正五）年十二月

二十一日の夜の礼拝で行われたものです。今日は、一部を省略しながら、ローマ字で書かれた原文をお読みして、シュネーダー先生のメッセージに触れてみたいと思います。（ただし、引用されている聖書の箇所は、新共同訳に変え、語尾の「ございます」を「です」に変えてお読みいたします。）

「我が学院では、今まではキリストが十字架につけられた日、すなわちGood Friday、及びキリストが昇天された日、すなわちAscension Dayだけにお祝いをしてきました。しかし、クリスマス、すなわちキリストのご降誕は今まで祝ったことがありませんでした。それは、いつもちょうど学校の冬休みにあたるからでした。労働会や各寄宿舎では祝ったことはありましたが、学校で、学校全体としては今まで祝ったことがなかったのです。

しかしながら、クリスマスというお祝いはキリストのご生涯において最も大切な、また最も麗しいお祝いですから、どうしても学校でもこのお祝いをして、学校の全体にその喜びを伝えるほうが良いと思い、今年から学校のクリスマスをはじめることにいたしました。一体、クリスマスの日は十二月二十五日ですから、今日すなわち二十一日に祝うのは少し早いのですが、皆さんの多くは明日お帰りになりますので、今日お祝いをすることにいたしました。多くの先生方と生徒たちが熱心にご準備をしてくださいましたことは、まことに感謝に絶えません。

クリスマスは、ご存知のとおり主イエス・キリストのご降誕のお祝いです。この祝いは非常に古く、紀元後四世紀の終わりごろから始まったのですが、ただ今はヨーロッパにおいても、アメリカにおいても、東洋においても広く行われています。すべてのキリストのご生涯に関する祝いのうちで一番おもしろい、一番喜ばしいお祝いです。私たちが信じるイエス・キリストは、使徒信条に書いてあるとおり「聖霊によって宿り、乙女マリアよりお生まれになられ」ました。この事実はマタイによる福音書一章及びルカによる福音書二章にも書いてあります。まことに不思議な、奇跡となっている出来事でしたが、その深い意味をたずねてみれば、これはヨハネによる福音書三章一六節にあらわれています。すなわち「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」またフィリピの信徒への手紙二章にもこう書いてあります。「キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。」これらによれば、イエス・キリストのご降誕によって神の愛が世の人々にあらわされたということがわかってきます。全能の神が私たち人間を愛し給うということは、イエス・キリストのご降誕によってあらわされたのです。

このために、キリストのご降誕は大きな喜びをもって迎えられたのです。そのお生まれにな

られたのはユダヤの国、ベツレヘムの村においてでしたが、ルカによる福音書に書いてあるとおり第一に彼のご降誕を称賛したのは天の使いでした。天の使いがベツレヘムの付近におった羊飼いにキリストのお生まれの喜びのおとずれを知らせたのちに、多くの天の軍勢があらわれ、使いと共に神をほめたたえて、「いと高きところには栄光神にあれ、地にはおだやか、人には恵みあれ」と言いました。そののち羊飼いは、ただちにキリストのお生まれになられたところへ訪ねて行って、幼な子キリスト及びその母マリアとヨセフに会い、神をほめたたえて帰りました。第三に喜びましたのはマタイによる福音書二章に書いてある東の方から来た博士たちでした。この人々はどこの国の者であったのか、またどうしてキリストのことを知ったのかはわかりませんが、とにかくキリストを拝するために来たのです。ほかに喜んだのはシメオンという常にエルサレムの宮に留まっていた老人でした。この老人はキリストを見ないうちは死なないと聖霊に示されていたのです。この人は幼な児キリストを抱き、神をほめたたえて、「主よ、今こそあなたは、お言葉どおりこの僕を安らかに去らせてくださいます」と感謝の祈りをささげました。

また当時ユダヤ国民全体にはキリストがあらわれるという希望がありました。彼らには数世紀前から来るべきメシアに関する希望があったのです。彼らはメシア、すなわちキリストが来ることを待ち望んでいました。このメシアに関する希望はことに旧約聖書のイザヤ書によくあ

らわれています。このためにメシア、すなわちキリストがようやく来られたということがわかった時にユダヤ人の多くは大いに喜んだのです。

今晩、ほとんど十九世紀ほどのちに生まれた私たちも、むかしの天の使いや羊飼いとともにイエス・キリストのご降誕をお祝いするのです。彼がこの世に降り、神の愛をあらわし、人の救いのために十字架につけられ、私たちの贖いとなられたことを感謝するのです。キリストは私たち今日の者たちにとって世の光となっています。この世の人々は暗い中を歩んでいます。世の人々の多くはとるべき道を知らないのです。愚かなことをしています。ただ今ヨーロッパで行われている戦争（注：第一次世界大戦）は最も愚かなことです。しかしながらキリストは、「私は世の光である。私に従う者は暗い中を歩かず、命の光を得る」と言われましたが、実にそのとおりです。またキリストは私たち人類の手本になりました。昔の哲学者はしきりに理想的人物について考えましたが、考えではなかなか満足なものをつくることができませんでした。しかしながらキリストは、ご自身で実際に理想的人物の生涯を実現されました。彼は世の中の唯一の理想的人物として、すべての人の完全な模範になられたのです。

その上また私たちは、キリストによって生まれ変わって新しい命を得るのです。「すべて彼を信じる者は滅びることなく、永遠の命を得る」と書いてあります。キリストは世の救い主です。彼を信じる者は罪と永遠の死から救われて、永遠に限りのない命を受けることになりま

す。彼は私たち人類の最大の幸福です。これと同時にこの新しい命に入った結果として私たちの目的も新しくなってくるのです。目的が自己中心的でなく、献身的にまた高尚になってきます。私たちの喜びも新しくなります。深い変わらない喜びになってきます。新しい、深い平和もできてきます。愛、新しい希望もキリストによって与えられます。キリストによって新たになった生涯は希望的生涯です。（中略）キリストは彼が歴史上に及ぼした影響と同じような影響を私たち一人ひとりの生涯にも及ぼしてくださるのです。

最後に、キリストは私たちに著しい力を与えてくださいます。私たち人間に最も必要なことは、精神上の力です。精神上の力が欠けているから人はさまざまな災いに落ちるのです。目的が良くても力が足らないから悪いことをするのです。キリストに連なっている者は、新しい力を与えられるのです。

このように、私たちがキリストに与えられた数々の恵みを考えてくれれば、私たちは非常に喜ばなければなりません。めでたいクリスマス！めでたいクリスマス！と祝わなければなりません。私たちはクリスマスをただ一瞬のお祭りとして祝うのではなく、この日の深い意味を考えてこの祝いを行い、新しい喜びと勇気をもって新年を迎えたいと思います。」

ある日の音楽礼拝

大学オルガニスト　今　井　奈緒子

二〇一九年五月二十七日（月）　泉キャンパス礼拝堂　　司会　野村　信 宗教部長

［前　奏］　J.S.バッハ　前奏曲 変ホ長調 BWV552/1 より

［讃美歌］　130

［聖　書］　詩編　第96編　第一節～四節

［讃美歌を歌おう］　讃美歌21　575番「球根の中には」（プリント参照）

［オルガン演奏］　A.ギルマン（一八三七―一九一一）作曲

G.F.ヘンデル作曲オラトリオ《マカベウスのユダ》よりパラフレーズ

［主の祈り］

［頌　栄］　542

［後　奏］　J.S.バッハ　フーガ 変ホ長調 BWV552/2 より

☆　讃美歌を歌う

今年のイースター（キリストの復活を祝う日曜日）は四月二十一日でした。その日から教会

の暦は「復活節」を刻んでいます。『讃美歌21』は一九九七年に、日本キリスト教団讃美歌委員会から出版されました。中でも最近ポピュラーになった感のある「球根の中には」を歌ってみましょう。アメリカの音楽家ナタリー・スリース（一九三〇―一九九二）が作詞作曲したこの讃美歌は、フォークソングのような親しみやすさ、歌い易さを持っています。三節のはじめにある〝いのちの終わりは、いのちの始め〟がキーワードとして、心に響いてきます。

ドイツに生まれ、イギリスに帰化したバロック音楽の巨匠G・F・ヘンデルは、その後半生に〝オラトリオ〟という、聖書に題材を取り英語の台本を持つ、器楽と合唱、独唱から成る大規模な作品を数多く残しました。有名なハレルヤ・コーラスを擁する《メサイア》が、特に有名です。オラトリオ《マカベウスのユダ》は、旧約聖書の続編の一書「マカバイ書」に描かれた、ユダという英雄を取り扱ったもので、中でも「見よ勇者は帰る」と訳されたコーラスの編曲が、それゆえに勝者をたたえる表彰式などで演奏されるのを、よく耳にすることと思います。

最初に歌う讃美歌は、この旋律に一九世紀に詞がつけられたもの。同じ題材から作られた、フランスの作曲家でオルガニストのギルマンの作品を聞いてください。

二〇一九年六月十九日（水）　多賀城礼拝堂　司会　木村　純二　大学宗教主任

［前　　奏］　N.ド.グリニ（一六七二―一七〇三）
組曲「来たれ、創造主なる聖霊よ」より
「来たれ、創造主」をテノールで／デュオ

［讃 美 歌］　178（一～四節）

［聖　　書］　使徒言行録　第二章一～四節

［演　　奏］　M.デュリュフレ（一九〇二―一九八六）
《来たれ、創造主なる聖霊よ》によるコラール変奏曲

［主の祈り］

［讃 美 歌］　178（五節）

［後　　奏］　J.S.バッハ（一六八五―一七五〇）
コラールファンタジー「来たれ聖霊、主なる神」BWV651a

今年のペンテコステ（聖霊降臨）は六月九日でした。主イエス・キリストの復活から五十日目に、弟子達に降った聖霊を記念し、全世界のキリスト教会で祝われました。この日が「教会」の誕生日だからです。今日演奏する曲はいずれも、「聖霊よ来たれ！そして私たちの心を燃え立たせてください アレルヤ！」と歌う賛歌をもとに作られています。

前奏は、バッハと同時代を生きたニコラ・ド・グリニの作品。グリニはフランス・シャンパーニュ地方の中心地ランスのオルガニストであった三十年余りの短い生涯に、オルガン・ミサ曲と五つの聖歌による組曲を残しました。

聖霊降臨の出来事を伝える聖書朗読のあとに、グリニの作品と同じ聖歌を題材にした、二十世紀の作曲家デュリュフレの近代的和声による変奏曲を演奏します。五曲の短い変奏が、いずれも個性的な音色を聞かせます。

バッハ作曲による晴れやかな後奏で、皆さんを送り出します。天候不順の毎日ですが、聖霊の風を受けて元気を出しましょう！

二〇一九年七月二十二日（月）　土樋ラーハウザー記念礼拝堂　　司会　野村　信　宗教部長

［前　　奏］　J.L.クレープス（一七一三―一七八〇）
　　コラール編曲「我ら皆、唯一なる神を信ず」

［讃 美 歌］　527（第一、四、五節）

［聖　　書］　マタイによる福音書　第五章一～五節

［オルガン演奏］　J.S.バッハ（一六八五―一七五〇）
　　コラール編曲「ただ愛する神にのみ信頼する者は」BWV691/690

G.A.ホミーリウス（一七一四―一七八五）
コラール前奏曲「ただ愛する神にのみ信頼する者は」

［主の祈り］
［頌　栄］　５４０
［後　奏］　J.S.バッハ
コラール編曲「ただ愛する神にのみ信頼する者は」BWV642

「ただ愛する神にのみ信頼する者は」と題されるコラール（宗教改革によって編まれたドイツ語による賛美歌）は、詩・曲とも十七世紀の牧師G.ノイマルクによって書かれました。今朝の音楽礼拝では、バッハと、バッハの弟子ホミーリウスがこのコラールをオルガン編曲した作品を演奏します。

聖書朗読後のバッハ作品はいずれも手鍵盤用で、最初の曲はバッハが息子フリーデマンのための、また二番目の妻アンナ・マグダレーナのためのクラヴィーア小曲集のどちらにも記している、豊かに装飾されたコラール旋律が美しい曲です。二曲目は駆け回る十六分音符のパッセージに、コラール旋律が見え隠れします。

ホミーリウスはバッハの息子たちと同じく、ライプツィヒ大学で法学を修める傍らバッハから作曲を学び、ドレスデンの聖母教会オルガニスト、最終的には同地の十字架教会、聖母マリ

ア教会、聖ゾフィー教会という主要三教会の音楽監督に就任した人物です。この編曲では、歌詞のもつ情緒を生かすような対位法が、用いられています。

後奏は同じコラールを元にした編曲で、バッハの《オルガン小曲集》に収められた名曲です。ペダル鍵盤も駆使して力強く展開します。

二〇一九年十月七日（月）　泉キャンパス礼拝堂　司会　川島　堅二　総合人文学科長
十月二十八日（月）　土樋ラーハウザー記念礼拝堂　司会　野村　信　宗教部長
十一月十三日（水）　多賀城礼拝堂　司会　田島　卓　大学宗教主任

［前　奏］　J．L．クレープス（一七一三―一七八〇）作曲
コラール編曲「おお永遠、汝雷（いかずち）の言葉よ」

［讃 美 歌］（3キャンパス共通）讃美歌21　440番

［聖　書］（泉）コヘレトの言葉　第一二章一節
（多賀城）エフェソの信徒への手紙　第四章一～六節
（土樋）詩編　第一〇八編一～七節

［オルガン演奏］　J．L．クレープス　コラール編曲「我らみな唯一なる神を信ず」
G．A．ホミーリウス　コラール前奏曲「備えよ、わが魂よ」

［主の祈り］

［頌　　栄］（3キャンパス共通）544

［後　　奏］ J.L.クレープス　コラール編曲「大いに喜べ、おおわが魂よ」

☆　バッハの弟子達によるコラール編曲

今朝は、ドイツの大作曲家ヨハン・ゼバスティアン・バッハの弟子達が、師匠に倣ってコラール（宗教改革によって生まれたドイツ語の賛美歌）を編曲した作品による音楽礼拝です。バッハBachは、日本語で「小川」を意味します。バッハが「わたしの小川に優秀なカニ（蟹）が居る」と褒めたと伝えられるのが、ドイツ語で「カニ」という意味のクレープスです。ライプツィヒ・トーマス学校に学び、バッハの仕事の助手や写譜係も務め、アルテンブルク城宮廷オルガニストとして活躍しました。クレープスは、師の作品を書き写したり模倣して、多くのコラール作品を書きましたから、「我らみな唯一なる神を信ず」が、長らく師匠であるバッハの作品として親しまれてきたのも頷けます。

一方ホミーリウスは、ライプツィヒ大学の法学部生になった頃から、バッハから作曲と鍵盤楽器のレッスンを受け、同市聖ニコラウス教会のオルガニスト助手、のちにドレスデンの主要三教会（十字架・聖母・聖ゾフィー）の音楽監督となりました。このコラール編曲は、最初に皆さんで歌った讃美歌のメロディを、ホミーリウスがオルガン用に編曲したものです。前奏も

後奏も、クレープスによるコラール作品です。

音楽礼拝　二〇一九（令和元）年六月三日（月）

宗教音楽研究所特任准教授　中　川　郁太郎

司　　式：野村　　信 先生
奏　　楽：今井奈緒子 先生
独　　唱：中川郁太郎 先生

［前　　奏］
［讃 美 歌］　４９９番
［聖　　書］　ヨハネによる福音書　第七章三七 節〜三九節
［独　　唱］　ヨハン・ゼバスティアン・バッハ　作曲
カンタータ第68番《げに神はかくまで世を愛して》（BWV68）より
アリア「汝われのために生まれたまえり」

［歌詞大意］　あなたは私への恵みとして生まれた。私はそれを信じ、勇気を与えられる。
あなたが私に十分なことをなしてくださったのだから。
たとえ大地の環が破壊され、サタンが私に向かって反論しようとしたとして

も、その時にこそ、救い主よ、あなたを拝もう。

［主の祈り］
［頌　栄］　５４４番
［後　奏］

【曲目解説】

聖霊降臨祭（ペンテコステ）二日目の礼拝のためのバッハの教会カンタータで、女流詩人ツィーグラーの詩に作曲されました。「神はその独り子をお与えになったほどに、世を愛された」（ヨハネによる福音書第三章一六節）という名高い聖句ではじまり、その独り子イエスが「援け手」としての聖霊の降臨を約束してくださったことに感謝する内容となっています。第四曲のバスのアリアは《狩のカンタータ》と呼ばれる世俗カンタータの転用（パロディ）で、牧神パンへの賛歌がそのまま「羊飼いイエス」への賛歌に転用されている、牧歌的でユーモラスな音楽です。

to praise your name. Thank you for giving us guidance in these beatitudes to live our precious lives in extraordinary, unusual ways that bring us closer to you and closer to each other. Teach us to blessedly serve one another by leading us to be more patient, more kind, more forgiving and more humble; especially when those around us don't expect it. Give us the strength we need to act with love for others.

Please come with us to our classrooms. Guide our studies so that we can learn the skills we need to fulfill your purpose for creating us. This we pray in Jesus' name, Amen.

What did Hoshino find that was more important and made his life fun to live? The words I underlined in Jesus' beatitudes are hints. These words/ideas can also be found in I Corinthians, chapter 13. This chapter of the Bible is called the 'love chapter'. Hoshino found that 'living with love for others' is more important than living with love for his own life. Jesus also says that the truly good life is for the people who are willing to lose their "good life" in order to give others a better life. Jesus says that the blessed, happy people are the people who are too patient with others, who are too kind to others, too agreeable, too humble, too forgiving, too modest, too honest, too gentle, too trusting and too hopeful. The outcome of living in this way is good for all people. Did you notice the outcomes Jesus promised? Being satisfied, receiving comfort, being able to meet God, becoming citizens of God's kingdom are a few of the outcomes of living according to Jesus' beatitudes. These promises can be reality for all people when we all live with love for others.

Today's Bible reading is the very beginning of Jesus' first lecture on earth, so this must be a very important basic teaching. In these beatitudes, Jesus is teaching us how living our life with love for others is much more meaningful than living our life for ourselves. This is living with a beautiful attitude!

Prayer

We thank you for another day in our lives that we can use

Blessed are those who *hunger and thirst for righteousness* (people who try to be honest), for they shall be satisfied.

Blessed are the *merciful* (forgiving people), for they shall obtain mercy.

Blessed are the *pure in heart* (kind people), for they shall see God.

Blessed are the *peacemakers* (agreeable people), for they shall be called sons of God.

Blessed are those who are *persecuted for righteousness' sake* (trusting people), for theirs is the kingdom of heaven.

Blessed are you *when men revile you and persecute you and utter all kinds of evil against you falsely because you believe Jesus* (hopeful people); Rejoice and be glad, for your reward is great in heaven.

Jesus' beatitudes are very different, aren't they? These beatitudes do not reasonably lead to a good life, do they? So, why did Jesus teach these beatitudes?

In order to understand what Jesus means, let's read a poem I recently found by a Japanese poet/painter named Hoshino Tomohiro. I think if we solve Hoshino's riddle, we can understand what Jesus means. This is Hoshino's poem.

When I thought that my life was the most important thing,
my life was very difficult.
When I realized that my life was not the most important thing,
my life became fun to live.

9 Blessed are the peacemakers,
for they will be called children of God.
10 Blessed are those who are persecuted because of righteousness,
for theirs is the kingdom of heaven.
11 "Blessed are you when people insult you, persecute you and falsely say all kinds of evil against you because of me. 12 Rejoice and be glad, because great is your reward in heaven, for in the same way they persecuted the prophets who were before you.

Meditation

The title of the bible reading for today is "The Beatitudes". In Jesus' lifetime, beatitudes were not unusual. Very often, people would use this type of sentence to remind each other of how to live the 'good life'. The people in those days might say, "Blessed are the hard workers, for they shall become rich," or "Blessed are those who enjoy learning, for they will know many things and enjoy their life." These beatitudes are reasonable. They show us how to get a 'good life' in this world! Let's compare these beatitudes to Jesus' list in today's bible reading. Jesus said,

Blessed are the *poor* in *spirit* (humble people), for theirs is the kingdom of heaven.

Blessed are those who *mourn* (patient people), for they shall be comforted.

Blessed are the *meek* (modest people), for they shall inherit the earth.

Living With A Beautiful Attitude

本学非常勤講師　Carol Sasaki
（佐々木　キャロル）

Bible Reading: Matthew 5:1-12
（マタイによる福音書５章１～12節）

5　Now when Jesus saw the crowds, he went up on a mountainside and sat down. His disciples came to him, 2 and he began to teach them.

He said:
3　“Blessed are the poor in spirit,
for theirs is the kingdom of heaven.
4　Blessed are those who mourn,
for they will be comforted.
5　Blessed are the meek,
for they will inherit the earth.
6　Blessed are those who hunger and thirst for righteousness,
for they will be filled.
7　Blessed are the merciful,
for they will be shown mercy.
8　Blessed are the pure in heart,
for they will see God.

編集後記

大学宗教主任　阿久戸　義　愛

「大学礼拝説教集」第二十四号をお届け致します。ここに収められている説教は、二〇一九年度に語られた説教を文章化したものです。また、通常の礼拝以外にも、英語礼拝や音楽礼拝（聖歌隊や教職員の演奏）など、様々な形式の礼拝を学生達は日々味わっています。この説教集を通して、東北学院が常に守ってきた大学礼拝の雰囲気を僅かでもお伝えすることができれば幸いです。

「一回的な出来事」であるところの礼拝は、説教者の声を通じ、また奏楽と音楽などを通じ、一人ひとりの心の中で常に新しく聞かれ、豊かに実を結んでいくものです。東北学院大学では、年間の授業期間を通して、三つのキャンパスで毎日、また三つの寄宿舎でも毎週、礼拝が守られています。すべてのキャンパスで行われる日々の大学礼拝こそは、キリスト教に基礎づけられた東北学院の建学の精神が、もっとも顕わにされる場であると言えましょう。このような場において、学生と教職員は、建学の精神への思いを新たにして行きます。

東北学院の大学礼拝での御言葉の取りつぎは、牧師だけでなく信徒教員も行います。それは

容易なことではありません。しかし、聖書のテキストに向き合い、貧しい証しの奉仕へと向かおうとする私たちの真摯な「チャレンジ」を、祈りにおぼえていただければ幸いです。

最後に多忙な研究や教育の毎日の中から時間をとって礼拝の担当をし、またこのように説教集の原稿を寄せてくださった教職員の方々に感謝をしたいと思います。

大学礼拝説教集

第二十四号

二〇二〇年三月三十一日発行

発行責任者　宗教部長　野村　信

編集責任者　大学宗教主任　阿久戸義愛

印刷・製本　株式会社　阿部紙工

問い合せ先　東北学院大学　総務課

〒980-8511　仙台市青葉区土樋一―三―一

☎〇二二・二六四・六四二八